

## 2.木津川河床遺跡第20・21次発掘調査報告

### 1. はじめに

木津川河床遺跡は、京都市街の南方にあり、木津川・宇治川・桂川の3川が合流し、淀川となって大阪湾へ流れる、その合流地点に位置している。今回、国土交通省近畿地方建設局淀川河川講堂事務所が実施する緊急河川敷道路整備事業の実施に伴い、道路建設部分と高水敷部分を工事することになり、その事前調査として、平成19年度と20年度の2か年にわたり発掘調査を、平成22年度には整理報告作業を実施した。調査地点は、現在河川敷ではあるが、明治2年の大規模な河川付け替え工事以前は、田畠が広がっていたようである。また、現在の河道は明治3年の付替工事によるものであり、河床で多くの土器・陶磁器が採集されていることから、木津川河床遺跡は古代～中世の集落があったと考えられている。遺跡の範囲は広く、木津川河川敷を中心に、東西4.5km、南北1.5kmの範囲が周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲である。現在までに21回の発掘調査が行われており、遺跡の東部で弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が確認されている。また、現在の河道の中で、中世と思われる井戸が点々と確認されている。今回の調査地は遺跡のもっとも西部に位置している。

平安時代前期に、調査地南方約1kmに、石清水八幡宮が造営され、天皇をはじめとして多くの人々の信仰の対象となり、中世には繁栄していた。同じ頃、木津川の対岸の大山崎町では荏胡<sup>えこ</sup>麻<sup>ま</sup>商人が活躍しており、調査地周辺が、全国と都とを結ぶ物流の拠点であったことが知られている。

なお、伏見城天守閣が倒壊した、いわゆる慶長の伏見大地震(1596年)に伴う噴砂も発掘調査で数多く見つかっている。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 (第20次)

調査第2課調査第1係長 小池 寛

同 次席総括調査員 伊野近富

同 主任調査員 松井忠春

同 調査員 松尾史子・筒井崇史

(第21次)

調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同 主任調査員 松井忠春・引原茂治・増田孝彦

同 専門調査員 石尾政信

(整理作業)

調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同 次席総括調査員 伊野近富

調査場所 八幡市科手～橋本

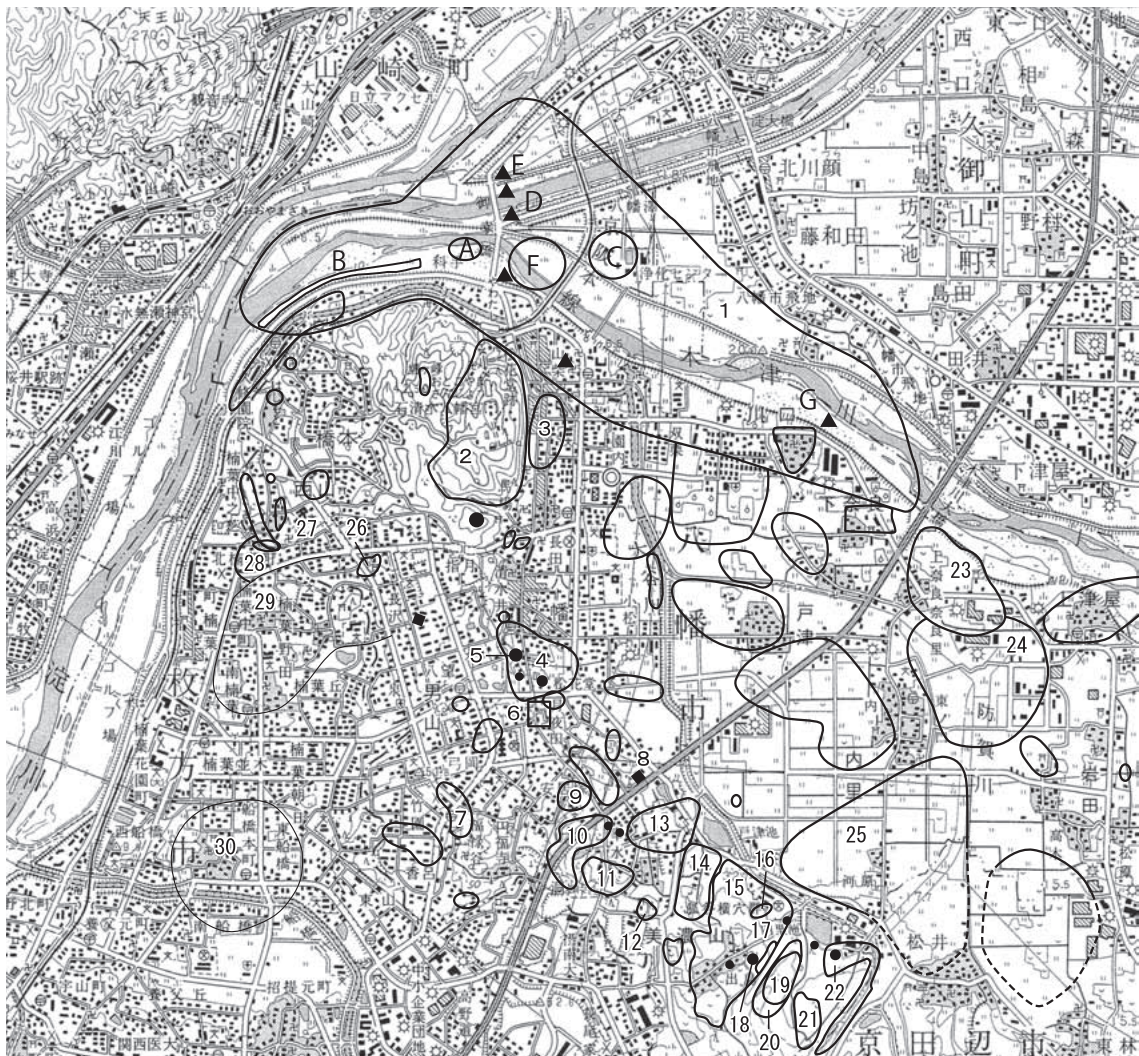
現地調査期間 (第20次)

平成19年10月30日～平成20年2月28日

(第21次)

平成20年11月13日～平成21年3月2日

調査面積 (第20次)



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/50,000 京都西南部)

- |          |             |              |            |             |
|----------|-------------|--------------|------------|-------------|
| A.調査地    | B.トレンチ調査地   | C.報告1ほか地点    | D.報告14地点   | E.報告15地点    |
| F.報告18地点 | G.報告9ほか地点   | 1.木津川河床遺跡    | 2.石清水八幡宮遺跡 | 7.幣原遺跡      |
| 3.山本町遺跡  | 4.女郎花遺跡     | 5.西車塚古墳      | 6.志水廃寺     | 12.宮ノ背遺跡    |
| 8.ヒル塚古墳  | 9.南山遺跡      | 10.備前遺跡      | 11.西ノ口遺跡   | 17.美濃山横穴群   |
| 13.幸水遺跡  | 14.金右衛門垣内遺跡 | 15.美濃山遺跡     | 16.狐谷横穴群   | 22.女谷・荒坂横穴群 |
| 18.王塚古墳  | 19.美濃山廃寺    | 20.美濃山廃寺下層遺跡 | 21.荒坂遺跡    | 27.楠葉平野山窯跡  |
| 23.上奈良遺跡 | 24.内里八丁遺跡   | 25.新田遺跡      | 26.西山廃寺    | 30.船橋遺跡     |
| (以下枚方市)  | 28.楠葉東遺跡    | 29.楠葉野田遺跡    |            |             |

3,300㎡

(第21次)

3,000㎡

## 2. 位置と環境

八幡市は、京都盆地から、奈良へ続く南山城平野との堺にある。南から流れてきた木津川と、東から流れてきた宇治川とが合流し、さらに、石清水八幡宮の北方で北側から流れてきた桂川と合流し、淀川となり、西方に流れるのである。木津川河床遺跡の東方には、かつて、水深の浅い巨椋池おぐらが広がっており、江戸時代以前の景観は現在のものとは大きく異なっていた。しかし、京都府と大阪府との境は、北側は天王山、南側は男山丘陵が迫って平地が狭くなっており、この地形の特徴から、洪水時には3川が合流した多量の水を一気に流すことができず、遺跡周辺は、古代からたびたび水害を被っていた。

当地の北西部に長岡京が建設されると、たびたび洪水の記事が正史に報告されるようになる。長岡京造営とともに山崎に橋が建設されるが、たびたび、洪水により被害をこうむったことが史上に見える。さて、この地が史上に大きく名を残すのは、平安時代になってからである。貞観2(860)年、平安京から見て裏鬼門にあたる男山丘陵に、平安京を護るべく石清水八幡宮が建立された。延喜16(916)年には伊勢神宮に次ぐ社格となった。さらに、平安時代中期(1097年)には、堀河天皇の奈良春日大社行幸の折り、平安京から奈良へと向かう道筋に当たっていたため、橋をかけたり、道路を整備したりと、多くの土木工事が行われている。平安時代中期以降、源平の争乱によって、南都奈良が甚大な被害をこうむるが、鎌倉時代初期の重源による東大寺再建事業のため、石清水八幡宮周辺は、大量

付表 木津川河床遺跡関係年表

の物資が行き来する地点として、重要度を増した。

さらに、中世では東大寺や興福寺などの奈良の大寺院に全国から多量の物資が送られてきたが、その際に水路・陸路ともにこの地を通過するので、津としても遺跡周辺は賑わっていたようである。

木津川の対岸の大山崎町では中世には荏胡麻商人が活躍しており、調査地周辺が、全国と都とを結ぶ物流の拠点であったことが知られている。

また、京都盆地から大阪平野の

	年代	主なできごと
長岡京期	784年	長岡京遷都
平安時代	794年	平安京遷都
	841年	山崎橋洪水で流失
	850年	山崎橋洪水で流失(場所を変えて再築)
	860年	石清水八幡宮造営(調査地より1km弱南東)
	861年	石清水八幡宮で初めて祈雨奉幣を行う
	863年	石清水八幡宮で放生会始まる
	979年	円融天皇が石清水八幡宮に初めて行幸 これ以降、たびたび行幸が行われる
	1097年	堀河天皇春日行幸のため、各国に路次の整備をさせる
鎌倉時代	1192年	鎌倉幕府成立
室町時代	1338年	室町幕府成立
織豊期	1596年	伏見大地震
江戸時代	1603年	江戸幕府成立
明治時代	1870年	木津川の付け替え
		これ以降3川の大改造が行われる

北部にかけて大きな被害を与え、伏見城天守閣が倒壊した、いわゆる慶長の伏見大地震(1596年)は、当地に甚大な被害をもたらしたが、これに伴う噴砂も遺跡の各所で見つかっている。

江戸時代後期に大洪水が起こり、地元住民から河川の整備要望が出され、ついに、明治3年に合流地点の付け替え工事が挙行された。以前は男山丘陵の北東部で合流していた3河川を、西側に移動させ、石清水八幡宮の北西部で合流させた。これによって、京都府と大阪府との狭隘部で滞留していた水をいち早く大阪側に流すことができるようになったのである。

### 3. 既往の調査成果

#### 1) 発掘調査

木津川河床遺跡では、数多くの発掘調査が行われているが、そのほとんどは遺跡地図で範囲が示されているほぼ中央部で実施されている。その地点は京阪電車軌道の東側にある洛南浄化センターに当たり、1983年から現在までに13回の発掘調査が実施されている。末尾に掲載した報告のうち、報告1～8・14・16・17・19が相当する。

洛南状かセンター付近は地表面が標高10mの低地で、旧木津川縁辺の自然堤防上に立地している。調査によって標高8.5mで、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡があったことが判明している。弥生時代後期では溝、土坑などが、古墳時代では竪穴式住居跡約30基が確認されている。ただし、古墳時代中期の住居跡はほとんどない。その後、後背湿地となった。中世には耕地化されたようである。また、伏見の大地震(1596年)の痕跡(液状化現象)が確認され、地震考古学の初期の成果があがった遺跡として有名である。近世には大規模な溝を掘削し、島状の高まりを形成して、島島が造成されるという立体的な景観であったことが想定される。

次に、御幸橋<sup>ごこうばし</sup>周辺の河川敷での調査については、弥生時代後期、古墳時代や中世の集落遺構が存在したことが高いことが推定されている(報告14-1・4地点)。また、やや北方の宇治川と桂川合流地点では、中世の墓が3基以上確認された(報告15)。

新御幸橋の木津川橋脚部については、河川敷の南部で発掘調査がなされている。うち、1箇所では江戸時代の道路の側溝と思われる溝2条が検出された。現在の橋脚と同方向である。道路の幅は4.5m、長さは11m分確認された(報告18)。この道路は石清水八幡宮の一の鳥居を北進する「御幸道」の延長部分である可能性がある。これより新しい時代の杭跡も確認されている。また、八幡市教育委員会により、八幡宮門前町が調査されている。

#### 2) 八幡市教育委員会による分布調査(報告9・11・12・19)

木津川河床遺跡の発掘調査が実施される中で、八幡市教育委員会による分布調査が実施された。A地区では河川内で井戸9基、柱5本が確認された。井戸板の上が海拔6.2～6.8mである。これ以外に、かつて方形の井戸1基が存在したらしい。また、御幸橋と平行して柱が154本確認された。B地区では、以前から住居跡と思われる窪地や大型動物の骨が散布していることが確認されているが、今回の調査では埋没したようで、顕著な遺構は確認されなかった。

C地区からE地区までの約1.4kmの間は、まんべんなく弥生時代から近世までの遺物が採集でき

た。しかし、遺構はD地区の方形の井戸1基のみを確認している。井戸板の上の海拔が7.1mである。

F～Hの地区でも弥生時代から近世までの遺物が採集された。H地区で井戸3基が確認された。うち1基については、かつて丸太を刳り貫いた井戸と報告されたものである。上端が海拔8.8mである。

報告19では、宇治川河床内の京都市境から三川合流域までと、木津川御幸橋下流100mから大阪府境までの木津川河床内を対象に行った調査が報告されている。中州を中心に遺物を収集したところ、御幸橋近くでは平安時代後期以降の遺物が確認されている。御幸橋下流域では護岸工事されており、遺物の採集量も少ない。

#### 4. 第20次(2007年度)の発掘調査

##### 1)はじめに

今回の発掘調査は、河道の掘り下げを行う河川敷の高水敷部分を面的に調査し、緊急用道路計画地では、御幸橋から南岸の堤防に沿って京都府・大阪府境までトレンチ調査を行った。高水敷部分はレンズ状の形をしており、南北に長く230m、東西は中央部が36mである。水が流れる河川敷より4mほど高い。

高水敷部分の調査前の状況は、本調査地点は草や灌木が茂る鬱蒼とした状況であった。調査時の御幸橋から大阪方面である下流を見ると、水が流れる川の南側に河川敷が広がっていた。河川敷は砂と円礫からなり、遺物が採集できた。高水位時期には冠水する場所である。それより南側の2mほど高い場所が今回の調査地である。さらに、南100mほど平坦面が広がり、土手に続いている。土手上面には府道13号が通っている。

トレンチ調査地は土手に平行して、高水敷部分の調査地付近から京都府と大阪府との境界線までが調査対象地であった。この場所も草が茂り、ところどころに灌木も生えていた。標高は13m前後である。さらに、希少植物のハナウドが自生しており、その箇所を避けてトレンチを設定した。

調査に使用した国土座標とレベルは国土交通省のデータである。レベルは大阪湾の海拔高(O.P.)である。

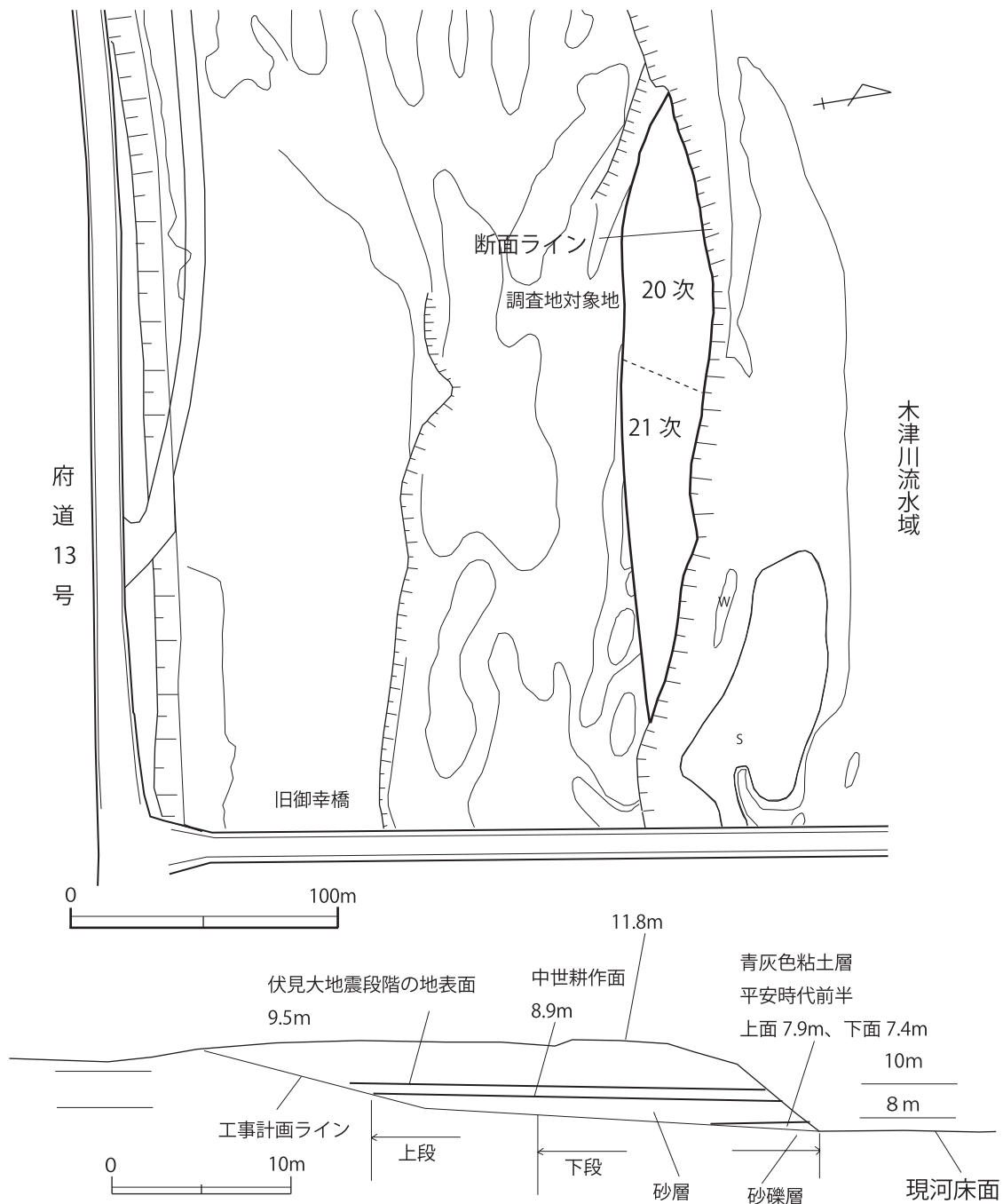
##### 2)高水敷部分の調査

(1)経過 本調査の掘削は重機で行った。上層面と下層面の都合2回使用した。面を下げる作業は人力で行い、最終時は高水位時期に冠水するレベルまで掘り下げた。

調査前の標高は11.8mであったが、重機掘削の結果、10mまでは近現代の堆積土であることが判明した。重機による第1回目の掘削は10mまでとして、そこから人力掘削で9.2mまで掘り下げた。重機による第2回目の掘削は8.6mまでとして、そこから人力掘削で7.9m(深いところで7.4m)まで掘り下げた。調査地の範囲は上段で東西120m、南北7～20mである。第3図のように地区を設定した。20mごとに西から1～5区、南からA～C区とした。

(2) 土層の説明

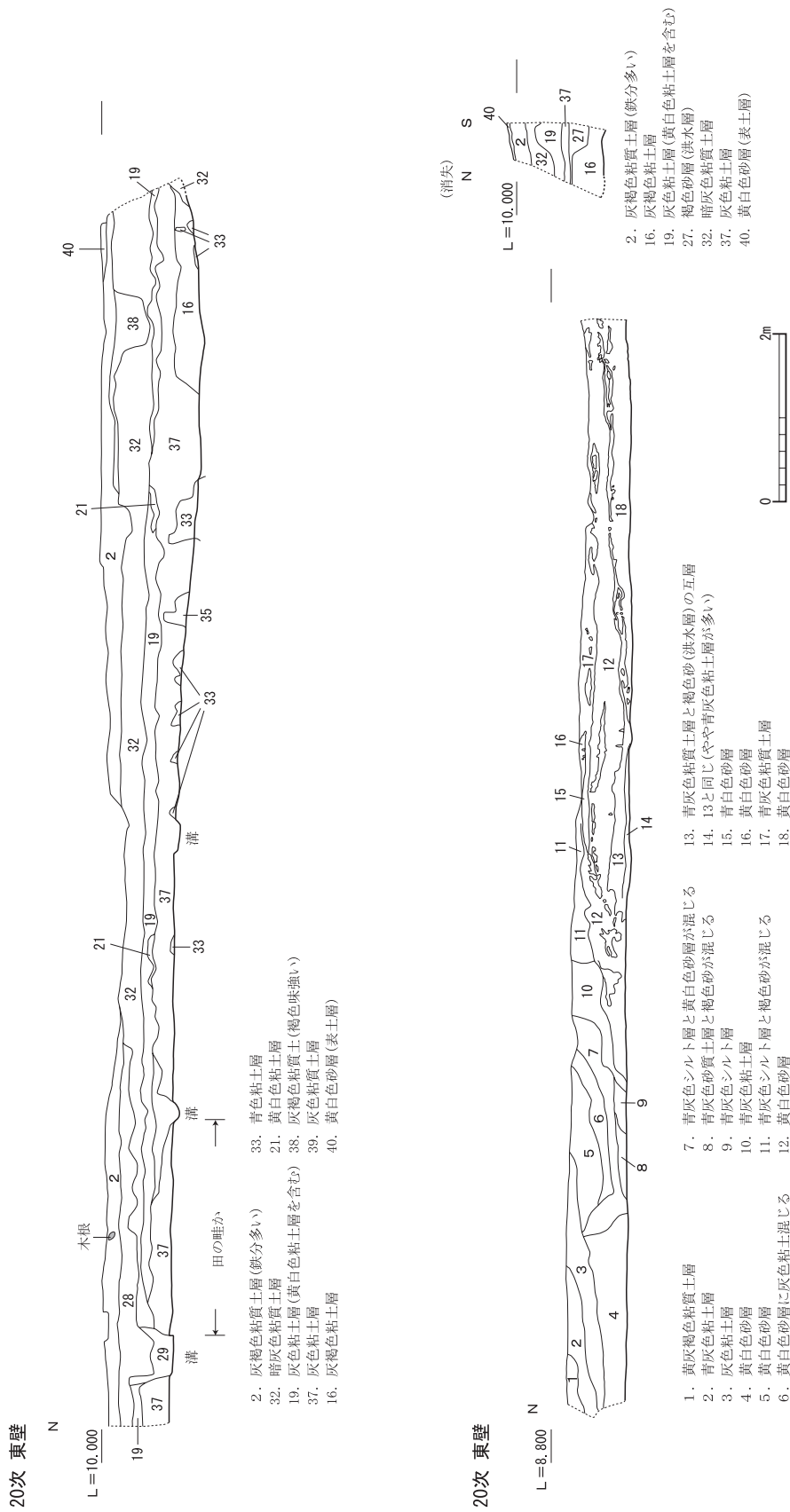
調査地東壁の上段土層観察(第4図)によれば、最上層は灰褐色粘質土(2)で、鉄分を多く含んでいた。この面が明治初期に河川付け替えが行われた直前の地表面と思われる。調査地南壁東部で認められた杭跡はこの面から打ち込まれたと考えられる。調査地上段の中位(9.5m)には灰色粘土層(黄白色粘土層を含む・19)が一面に広がっていた。図版第5(3)には噴砂が認められた。この高さが慶長の伏見大地震の時の地面である。黄白色粘土層の存在は調査地全体が一時期水没したことを示している。地震の2日後に洪水が発生しており、この事象に対応している。伏見大地震のため、調査地全面に亀裂が入っており、たびたびあったと考えられる洪水とともに、土層



第2図 第20・21次調査地位置図



第3図 第20次調査地平面図(上層面・下層面)



第4図 第20次調査地東壁土層断面図

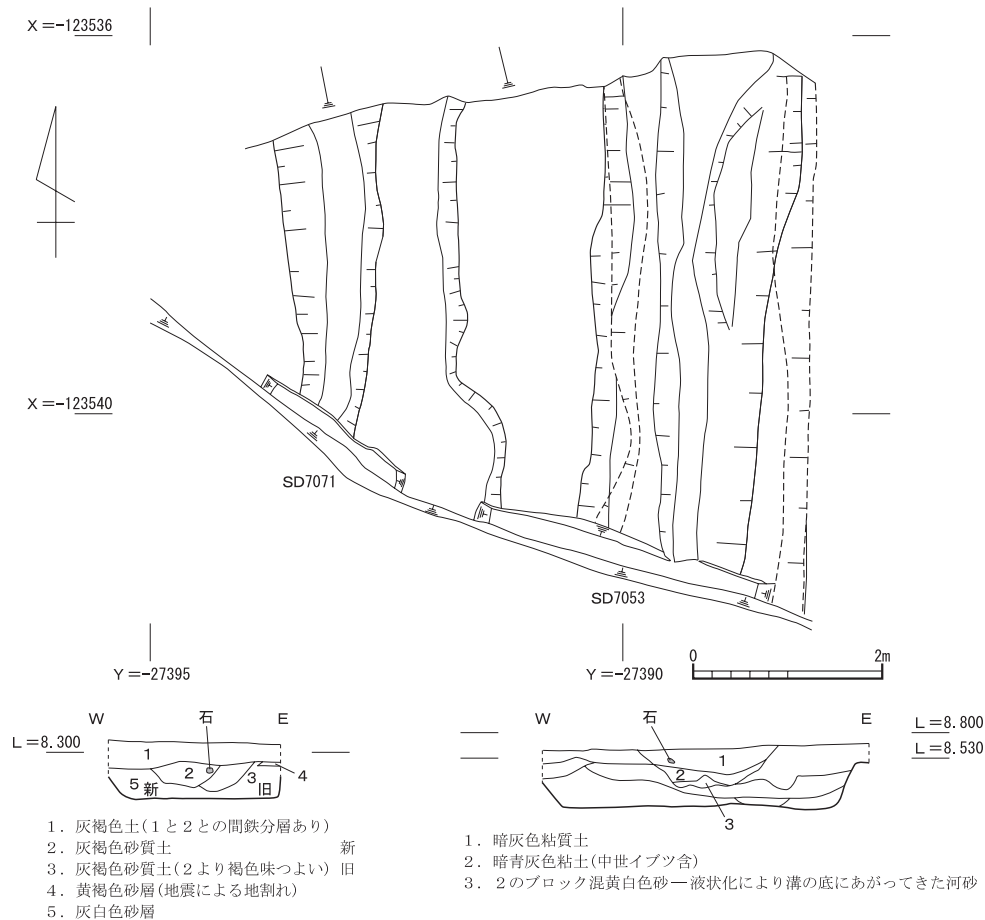


の観察、および遺構の検出は困難を極めた。9.4m以下は灰色粘土層で、耕作面と考えられる。

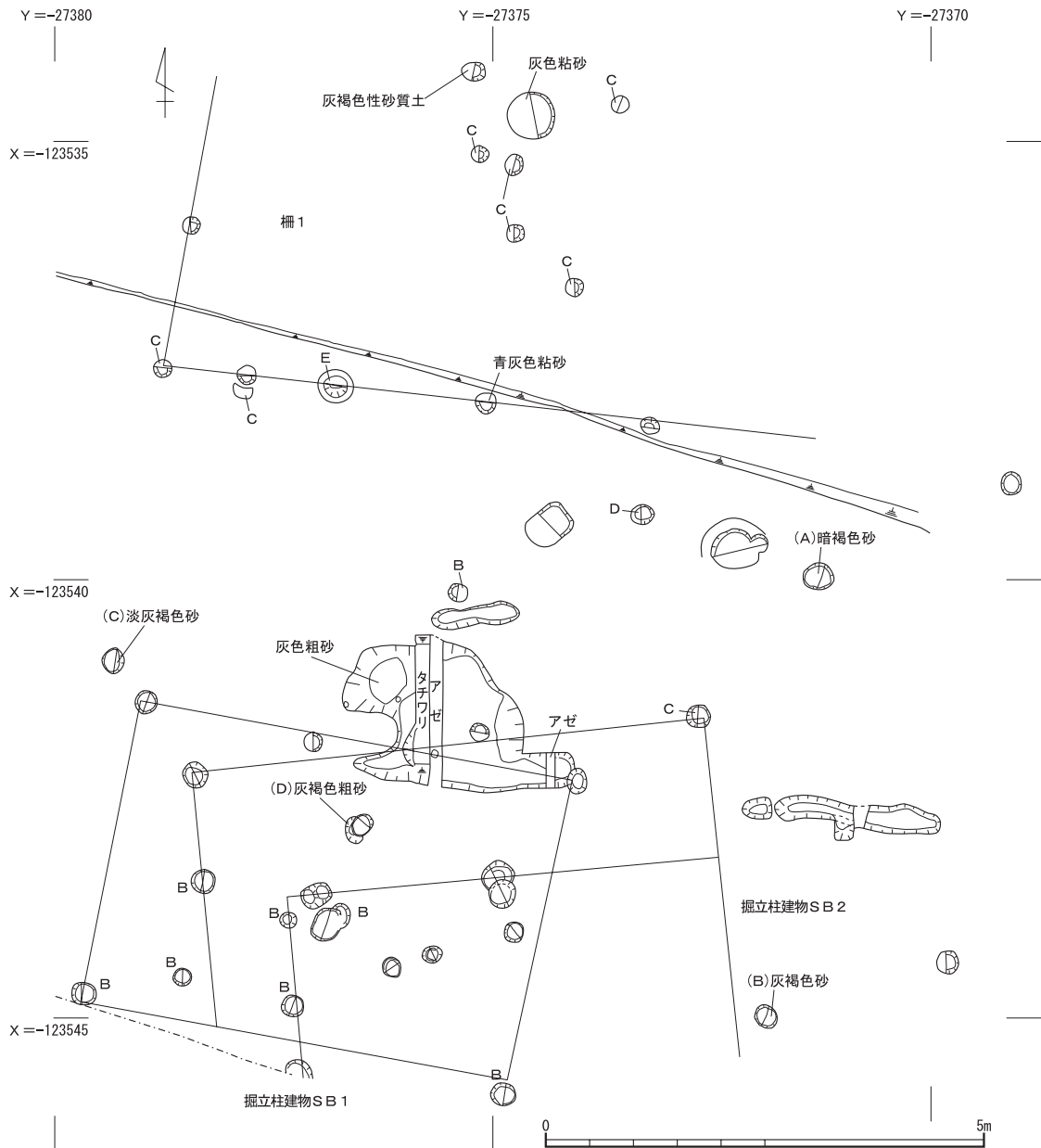
土層断面下段は灰色粘土層と黄白色砂層があり、たびたび洪水があったことを示している。調査地中央の北部では灰色粘土層が広がり、北側に向かって低くなっていた。最下面は7.4mで、出土遺物から平安時代前期の湿地であることが判明した。

### (3) 検出遺構

上層で検出した遺構は、杭跡、耕作溝、区画溝などである。遺構は大きく3区に分かれる。東部ではやや北に振る東西方向の耕作溝 S D7013が広がる。これは中央部の北部にも広がっていた (S D7009)。なお、灰色粘土層の一部に下層から吹き上げた砂層が認められた(図版4-3)。南端はやや東に振る南北方向の耕作溝が広がる。したがって、調査地内で南北を分ける土地の境界があったことがわかる。なお、西部では、河川敷に近いところで方形土坑群を検出した。江戸時代と思われるが出土遺物はなかった。内部には砂が堆積しており、洪水によって埋没したようである。全形のわかる S K7003は南北7.6m、東西5.6mである。耕作地の横であり、簡単な地下倉庫として利用していたかもしれない。調査地の西端で南北方向の溝を2条検出した。西側が S D7071で、東側が S D7053である。規模は、S D7071が新旧あり、西寄りにある新しい溝が東西0.7m、南北3.4m以上である。深さは0.2mである。東寄りにある古い溝は、西肩が新しい溝により掘り直されている。東西0.6m、南北4.4m以上である。S D7053が東西3.2m、南北5.4mである。



第5図 第20次調査地溝 S D7053・7071平・断面図

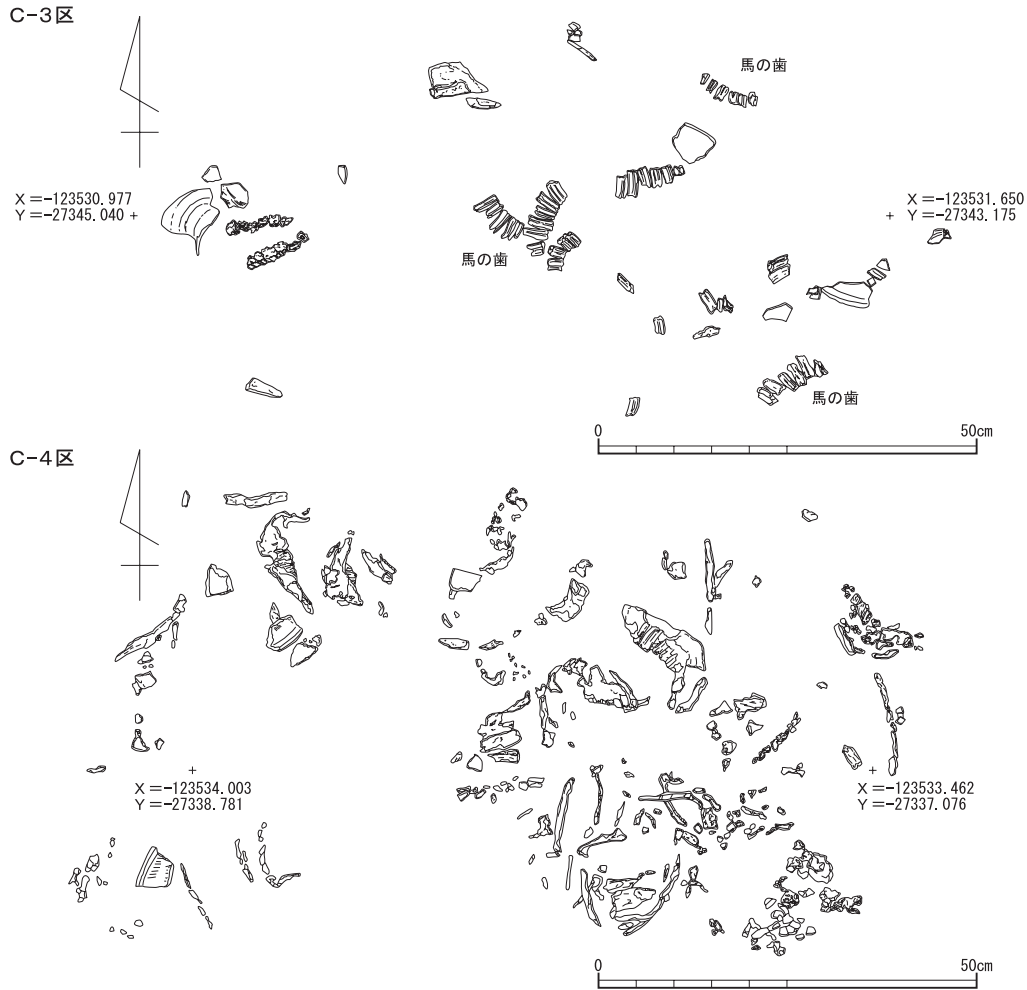


第6図 第20次調査地掘立柱建物跡SB1・2、柵1平面図

深さは0.6mである。断面は半円形である。土地利用の際の大区画の境界を示している可能性がある。上層の時代は出土遺物から室町時代から江戸時代までを想定している。

下層では掘立柱建物跡、柵、沼状地形、動物遺体などを検出した。土層断面の観察により、最下層は湿地が広がる低地であった。湿地はとくに、北側に広がっており、現河道流水域に近い場所がかつて湿地であったことがわかった。ここで、多くの動物遺体が平安時代前半の土器とともに検出された。たびたび、洪水にあったようで、黄色砂層と黒色粘土層との互層が確認できた。南側に向かって地形は徐々に上がっており、西部では高さ8mで平安時代後期の面を確認し、掘立柱建物跡や柵を確認した。さらに西で南北方向の溝を確認した。

掘立柱建物跡は、砂層をベースとしており、埋め土には砂層に若干粘質土が入っただけで、検出は困難を極めた。2棟を確認したが、全容は不明である。



第7図 第20次調査地動物遺体出土状況図(C 3・4区)

掘立柱建物跡S B 1は東西3間、南北1間以上である。柱間は不揃いである。柱穴は直径25cmで、深さは20cmである。建物方位は、北に対して12度東に傾いている。

掘立柱建物跡S B 2は東西3間、南北1間以上である。柱間は不揃いである。柱穴は直径30cmで、深さは20cmである。建物方位は、北に対して6度西に傾いている。

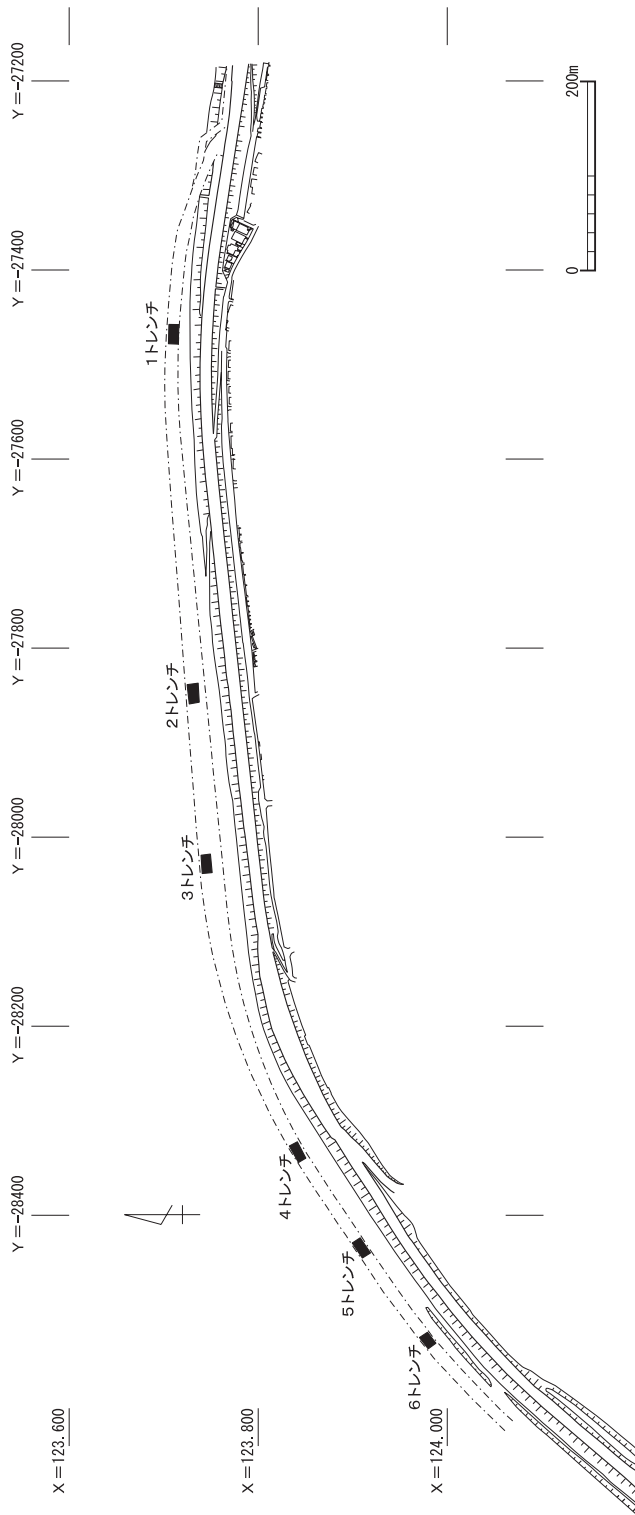
これらの建物跡の北側で柵を確認した。「L」字状に屈折する。柱穴は6か所検出した。南北1.6m以上、東西5.6m以上である。

調査地北側で東西48m、南北8mの範囲で湿地帯を確認した。青色粘土層が埋め土である。この中に平安時代前期から中期初めの土器を包含していたが、それとともに多くの動物遺体が出土した。埋没していたのはC 2・3区を中心としており、湿地と陸地との境に集中していた。範囲は東西4.8m、南北8mである。

遺物の観察によれば9世紀後半から10世紀に湿地は形成されたが、その直後一気に洪水層が湿地を覆っており、その洪水層により陸化したことが判明した。この上面が平安時代後期の面で、前述した建物や柵が建設されている。また、溝もこの時期になって掘削されたと考えられる。

### 3) トレンチ調査

南岸の堤防に沿って京都府・大阪府境までをトレンチ調査した。延長1.2kmの範囲に6か所の



第8図 第20次調査地トレンチ配置図

トレンチを設定した。東から西へ第1トレンチから第6トレンチまで設定した。各トレンチは東西20m、南北10mで、砂地のため調査の安全を考慮して上面は一回り広く重機で掘削した。

**第1トレンチ** もっとも東側に設定した。上面の標高は13.8mで、下面は11.44mである。粘土と砂層との互層であった。特に顕著な遺構はなかった。

**第2トレンチ** 上面の標高は13.5mで、下面は10.5mである。粘土と砂層との互層であった。特に顕著な遺構はなかった。

**第3トレンチ** 上面の標高は12.6mで、下面は10.1mである。粘土と砂層との互層であった。特に顕著な遺構はなかった。小破片ではあるが瓦器碗や中国製白磁碗・緑釉盤などが出土した。いずれも、平安時代後期から鎌倉時代のものである。

**第4トレンチ** 上面の標高は12.8mで、下面は9.5mである。粘土と砂層との互層であった。特に顕著な遺構はなかった。

**第5トレンチ** 上面の標高は12.4mで、下面は9.6mである。粘土と砂層との互層であった。特に顕著な遺構はなかった。小破片ではあるが中国製白磁碗が出土した。平安時代後期から鎌倉時代前期のものである。

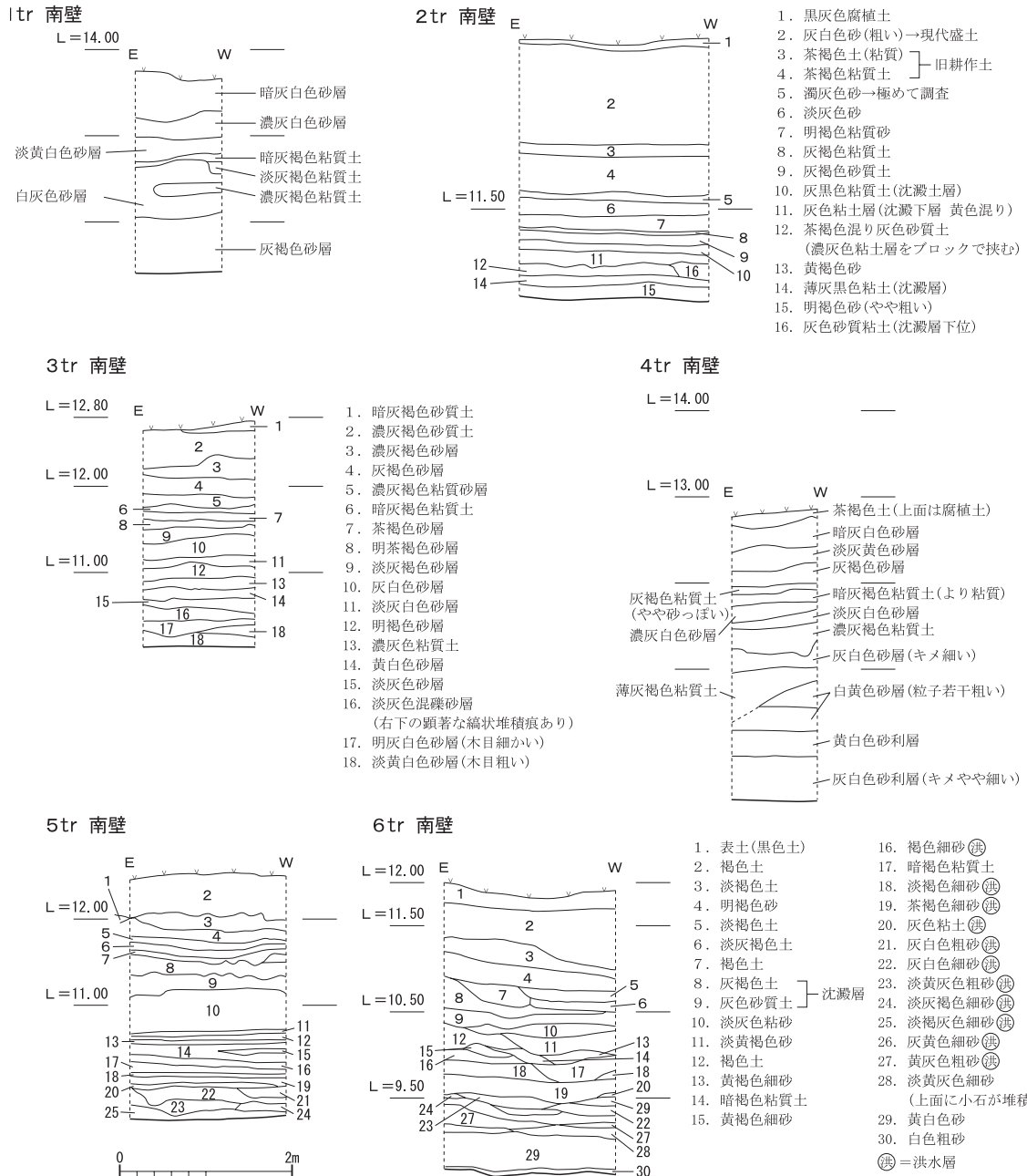
**第6トレンチ** もっとも西側に設定した。上面の標高は12mで、下面は7.7mである。粘土と砂層との互層であった。特

に顕著な遺構はなかった。

以上の結果、遺構面はさらに深い地点であり、今回の地点では顕著な遺構・遺物は確認されなかった。

#### 4) 出土遺物

遺物は整理箱で40箱出土した。種類は土師器皿・羽釜、黒色土器碗・杯、緑釉陶器碗、灰釉陶



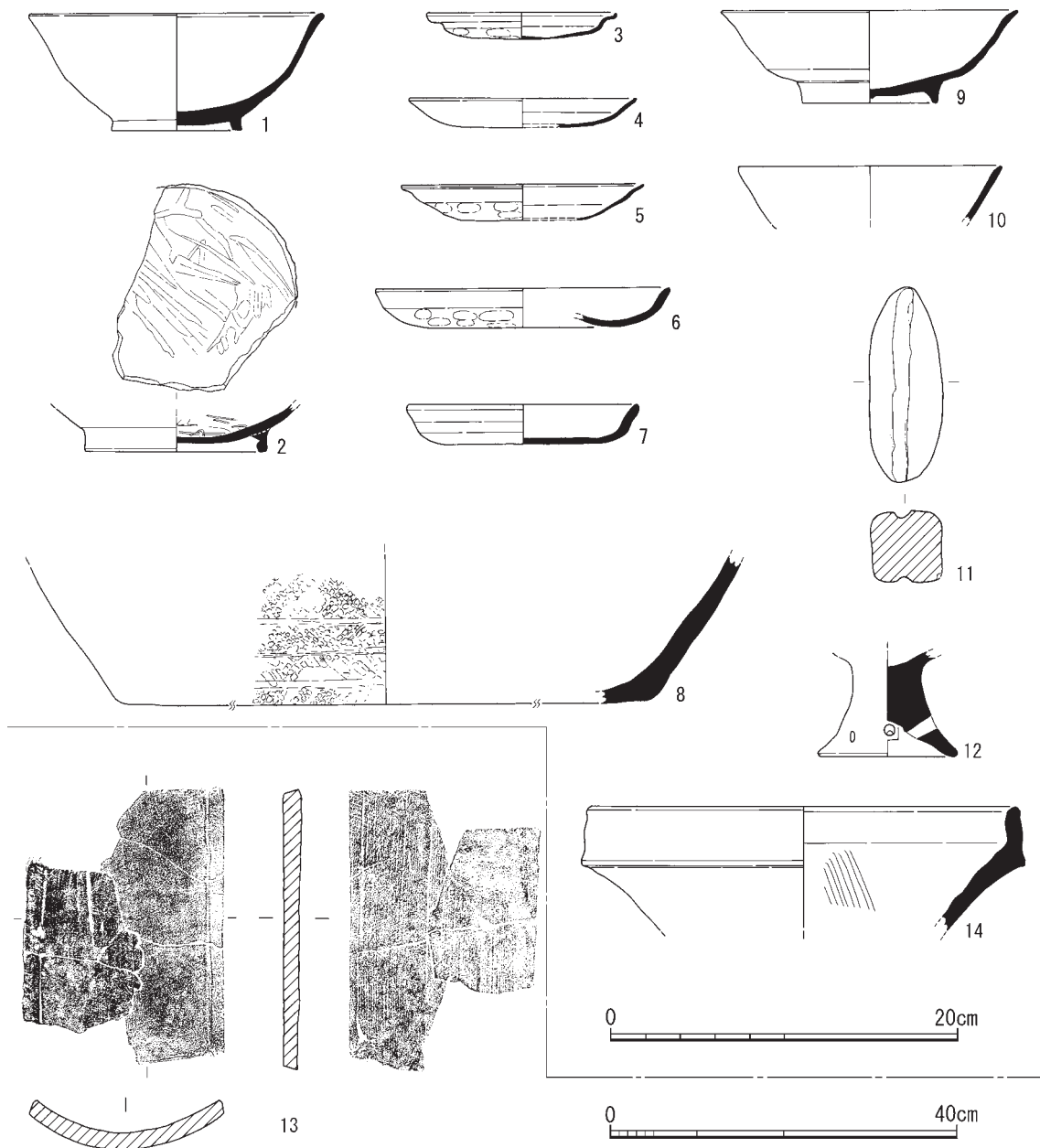
第9図 第20次調査地各トレンチ土層断面図

器壺、須恵器甕・鉢、白色土器、備前鉢、信楽鉢・甕、中国製青磁・白磁などである。

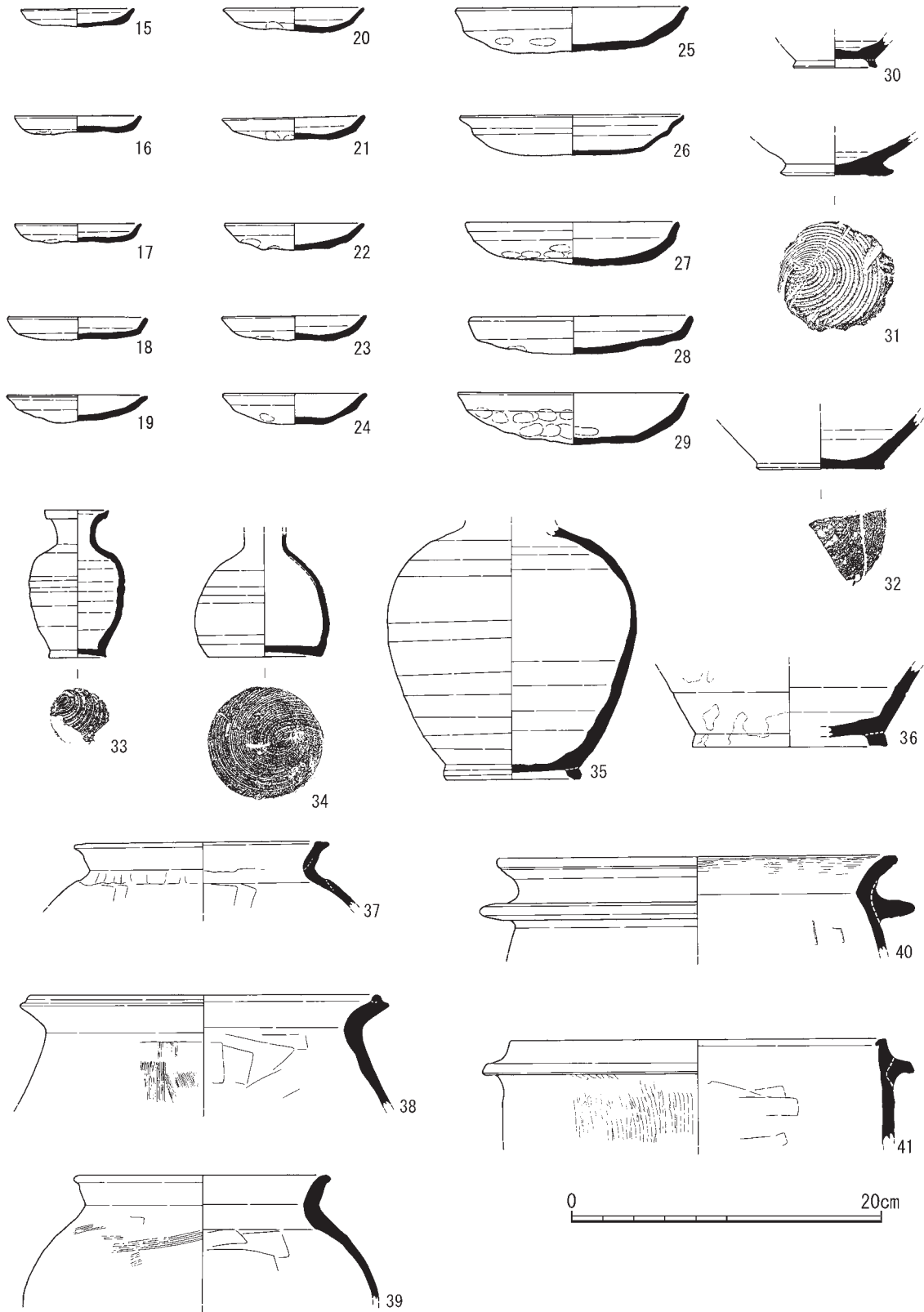
1は緑釉陶器碗である。口縁部がやや外開きで、高台は貼り付けである。釉は緑色で、ところどころ濃緑色である。これは、水により変色したと考えられる。釉は全面に施されており、古い様相である。断面は褐色で、白色砂を含んでいる。口径16.7cm、現存の器高6.8cmである。亀岡市篠古窯址群の大谷窯に類例があり、9世紀後半のものである。C2区、青色粘土層(7.3m)から出土した。2は黒色土器碗である。底部のみ遺存している。内面のみ黒色で、いわゆる内黒タイプである。見込みに荒いミガキを施す。高台径10.3cmである。C3区出土。3は土師器皿である。口縁端部を内側に巻き込んだての字状口縁のタイプである。てづくね成形で、色調は淡褐色である。口径10.8cm、現存の器高1.6cmである。C3区出土。4は土師器皿である。てづくね成

形で、色調は淡褐色である。口縁部には一段なでを施す。口径13.1cm、現存の器高1.7cmである。C 3区出土。5は土師器皿である。てづくね成形で、ての字状口縁のタイプである。色調は淡褐色である。口縁部には一段なでを施す。口径14cm、現存の器高2.1cmである。C 3区出土。6は土師器皿である。てづくね成形で、色調は淡褐色である。口縁部には一段なでを施す。口径16.9cm、現存の器高2.3cmである。C 1区、S D 7053出土。7は土師器皿である。てづくね成形で、色調は淡褐色である。口縁部には一段なでを施す。口径13.2cm、現存の器高8.6cmである。B 2区出土。6は12世紀、7は12世紀後半である。これ以外の土師器皿は10世紀中葉から後葉である。

8は須恵器甕である。底部のみ遺存している。外面にタタキ痕がある。内面はナデで仕上げている。底径70cm以上。C 3区出土。9は白色土器である。内外面とも回転ナデである。削り出



第10図 第20次調査出土遺物実測図(1)



第11図 第20次調査出土遺物実測図(2)



第12図 第20次調査出土遺物実測図(3)



し高台で、中央部は突出している。胎土には砂粒を含む。焼成は良。色調は黄白色である。口径17cm、器高5.4cm。C3区から出土した。10は白磁碗である。口縁部は肥厚しない直口のものである。C2区、SK7090出土。12世紀である。11は土錘である。細長い卵形で、両端に窪みの筋を刻んでいる。長さ11.3cm、幅4.2cmである。C4区出土。12は弥生時代の高杯である。杯部は欠損している。下部に5か所の透かし穴がある。C3区出土。13は平瓦である。縄目のタタキを施す。B2区出土。14は備前鉢である。包含層から出土した。

15～24は土師器皿の小皿である。てづくね成形で、色調は淡褐色である。口縁部には一段なでを施す。15はSD7053、19はSD7071から出土した。13世紀である。他はC2区の下層で、12世紀である。これらの口径9cm前後、器高1.5～1.8cmである。25～29は土師器皿の中皿である。てづくね成形で、色調は淡褐色である。口縁部には一段なでを施す。その下にさらにユビオサエを施すため、あたかも二段ナデのような外形を呈する25・27・29のようなものもある。C2・C3区出土。11世紀。口径13.5～14.7cm、器高2.4～3cmである。

30・31・32は須恵器杯である。30は貼り付け高台、31・32は糸きり底である。C3区出土。33は須恵器壺である。完形品である。口径4.2cm、器高9.5cm、内外面ともロクロナデで仕上げている。亀岡市篠窯産で、10世紀である。色調は灰色で、断面はえんじ色である。C3区出土。34は須恵器壺である。体部下半が膨らむタイプである。器厚は薄い。亀岡市篠窯産である。C3区出土。35は須恵器壺である。外面には自然釉がかかる。底径8.6cm、現存高16.2cmである。底部は貼り付け高台で、東海系である。C2区出土。灰釉陶器の可能性もある。36は須恵器壺である。底部のみ遺存している。貼り付け高台である。灰釉陶器の可能性もある。C3区出土。

37は土師器甕である。「く」字状の口縁部のみ遺存している。外面に煤が付着している。C4区出土。38は土師器甕である。「く」字状の口縁部のみ遺存している。外面には煤が付着している。外面はハケ目調整である。C3区出土。39は土師器甕である。「く」字状の口縁部のみ遺存している。外面はハケ目調整である。C4区出土。40は土師器羽釜である。「く」字状の口縁部の屈曲部に鏝をつけたものである。鏝は水平方向につけられている。外面には煤が付着している。C4区出土。41は土師器羽釜である。口縁部は屈曲せず、口縁部のすぐ下に鏝をつけている。体部外面には縦ハケを施す。胎土には砂粒を含む。焼成は良でC4区出土。42～56は土師器羽釜である。41と同じタイプである。胎土には砂粒を含む。焼成は良で、色調は明褐色である。何度も使用されたのか、一部は灰褐色に変色している。44・52・54・55はC2区、42・43・45・47はC3区、46・48・49・53・56はC4区から出土した。これらは撰津型で、10世紀である。以下は写真のみである。151は黒色土器B類碗である。152は黒色土器A類杯である。153は瓦器碗である。

## 5) 小結

洪水によって形成された湿地(青色粘土層)から、多数の獣骨と平安時代前～中期の土器が出土した。獣骨は馬が40頭以上、牛が数頭(丸山真史氏より)であった。土器の種類は、緑釉陶器碗や黒色土器碗、土師器杯・皿、土師器甕などである。この湿地は徐々に北側へ後退し、陸化したようであるが、特に、平安時代中後期の大洪水によって1m近く砂が堆積し、一気に陸化した。そ

の地表面で掘立柱建物と考えられる柱穴が発見された。調査地の西部のみ認められた。その後、田畑が形成されたようで、耕作に伴う溝が確認された。

この段階で大地震があり、下から噴き上げた砂(液状化現象の一部)が各所で認められた。おそらく、慶長の伏見大地震(1596年)に伴うものと考えている。

試掘調査地は、6か所のトレンチを設定し、現地表面から3～4mほど掘り下げたが、近世以降の砂ばかりで、遺構面はさらに下部であったようである。

#### 6)まとめ

御幸橋の西側では、2007年度に初めて2,000㎡という広い面積を調査することができた。調査前の形状は、河川敷より2mほど高く、旧地表面が残っていた。調査の結果、上層の近世面は標高8.9m、下層の平安時代前中期面(青灰色粘土層)が7.4mであることが判明した。湿地であったことを示す青灰色粘土の中には、牛馬が埋没しており、放牧された牛馬の存在と、その自然死以外に、なんらかの祭祀がこの地であったことを示しているのかもしれない。同じ場所で、平安時代前期の土器・陶磁器が出土した。破片の角は鋭く、再堆積したものではない。近隣から人為的に持ってこられたものといえる。

土層の観察によれば、大小さまざまな洪水に見舞われたことがわかった。それにもかかわらず、平安時代後期には小規模な建物を建て、耕地を形成するという、営みを知ることができた。

湿地は徐々に北側へ後退し、陸化したようであるが、特に、平安時代中後期の洪水によって1m近く砂が堆積し、一気に陸化した。その後、田畑が形成されたようで、耕作に伴う溝が確認された。

この段階の後期で大地震があり、下から噴き上げた砂(液状化現象の一部)が各所で認められる。おそらく、伏見大地震(1596年)に伴うものと考えている。この状況は上流側でも確認されており、広範囲に災害が及んだことが知られる。

20世紀以降は、川底が深く削られるようになった。たとえば、御幸橋の橋脚台の基礎部分のコンクリートが見えており、設置したときより、1m以上は削られたといえる。古代中世の地面が徐々に流出していることがわかる。

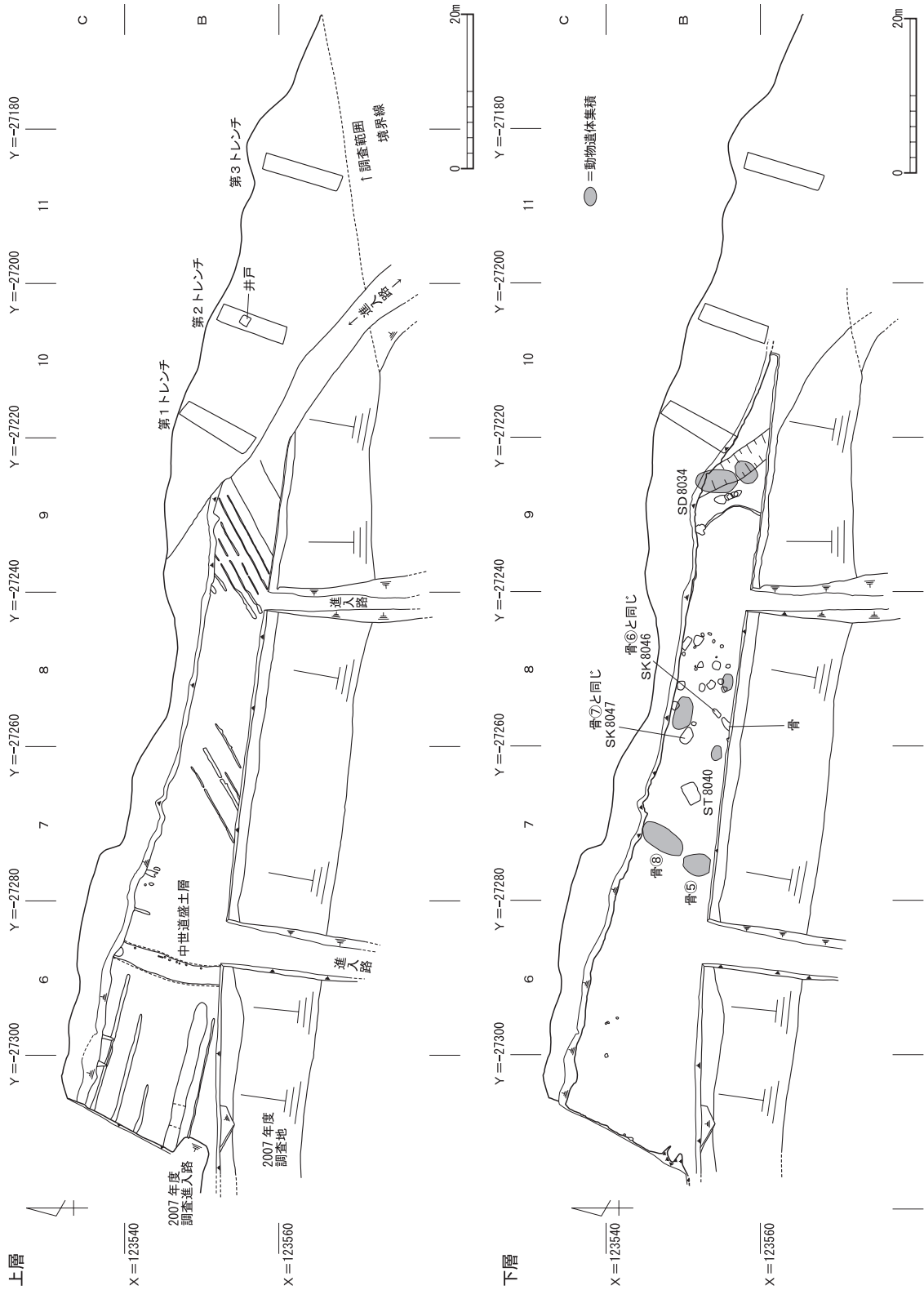
### 5. 第21次(2008年度)の発掘調査

#### 1)はじめに

第21次の発掘調査は、第20次調査に引き続いて、河川敷の高水敷部分の東側部分で実施した。西端は第20次調査地の東端に続いている。第21次の東北部は一段下がっており、現水面より若干高いだけで、雨の後には水位が上昇するので何度か冠水した。

本調査の掘削は重機で行った。上層面と下層面の都合2回使用した。面を下げる作業は人力で行い、最終時は高水位時期に冠水するレベルまで掘り下げた。

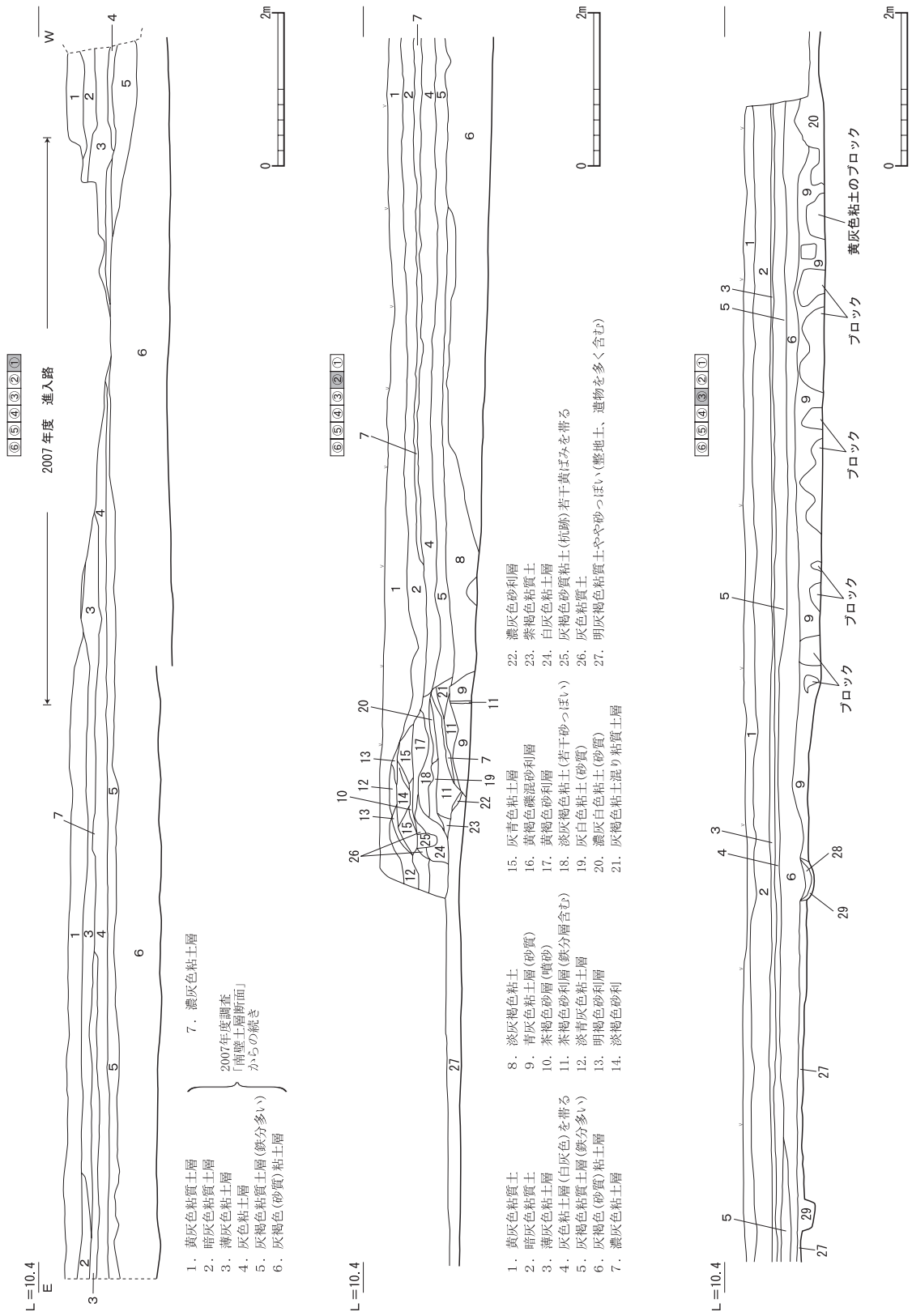
第20次調査の地区割りを援用して第13図のように地区を設定した。20mごとに西から5～11区、南からB・C区とした。



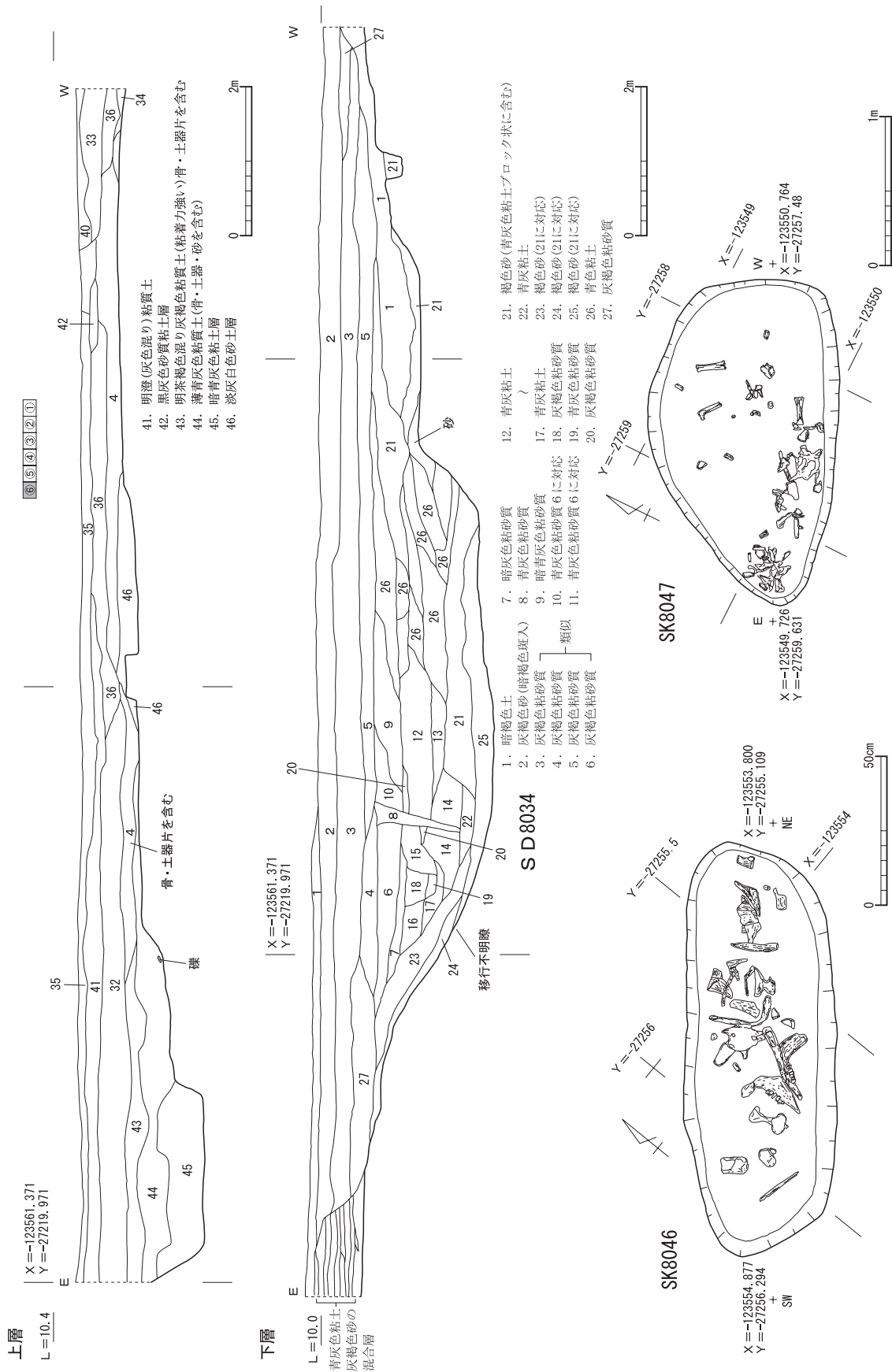
第13図 第21次調査地平面図

## 2) 土層の説明

調査地西端の土層観察(第14図)によれば、最上層は黄灰色粘質土(1)である。第20次調査の土層と同じく、この上面が明治初期に河川付け替えが行われた直前の地表面と思われる。高さは東端で10m、西端で10.2mである。高さ9.4mにある灰色粘土層(4)の上面は第20次調査で観察した



第14図 第21次調査地南壁土層断面図(1)



第15図 第21次調査地南壁土層断面図(2)及び土坑S K 8046・8047平面図

慶長の伏見大地震の時の地面である。第14図の土層断面の上から2段目中央に、かまほこ上に盛り上がった土層があり、これは畔の断面である。この畔の下部から噴砂が真上に吹き上げた土層(11)が認められるが、(4)層の1層下で止まっており、地表面までは吹き上がっていない。調査地東端では(4)層は断続的になっていた。この層の下には幅広い溝が確認された。その中から平安時代後期から鎌倉時代初期の土器が多量に検出された。また、溝の東側には断面がかまほこ状に盛り上がった土層があり、ここにも畔があったことがわかる。第20次調査で検出した溝S D 7071とそのそばにあった平安時代後期の建物と一対の施設であったかもしれない。

なお、今回の調査区では平安時代前半の湿地は検出されなかった。

### 3) 検出遺構

上層で検出した遺構は耕作溝(高さ9.3m)、畔道である。溝の方向は2種あり、西部はほぼ東西方向、中央部から東部は北に向かって西に斜行している。西部は第20次調査地で確認したほぼ東西方向の溝とつながっている。この溝は西側進入路付近で終息しており、そこには、南北方向のあぜ道がある。このあぜ道を堺に溝の方向は相違する。上層は土層観察から室町時代から江戸時代にかけてのものである。この段階の最終で大地震が生じ、下から吹き上げた砂(液化現象の一部)が随所に認められた。慶長元年(1596年)の伏見大地震に伴うものと考えている。

下層は30～50cm掘り下げて確認した。土層の観察から、洪水によって形成された砂地の上面を客土で整地したようである。

その整地層上面から中世段階に掘削された溝や土坑が確認され、柱跡もあり、多数の骨化した動物遺体や土器などが出土した。土器には土師器皿・鍋・羽釜・瓦器椀などがあり、青磁・白磁の中国製陶磁器も含まれる。動物遺体は主に牛で、馬が若干量ある。また、東側の低地で方形の井戸枠を検出した。

井戸S E 8020は調査中にたびたび冠水したため、掘形の外形は不明であるが、おそらく、方形で1辺2mであったと思われる。その中央に1辺1mの方形に組んだ井戸枠を確認した。さらにそのなかに曲げ物が据えられていた。井戸の上部はすでに失われており、井戸が機能した地面は9m程度であったと考えられる。

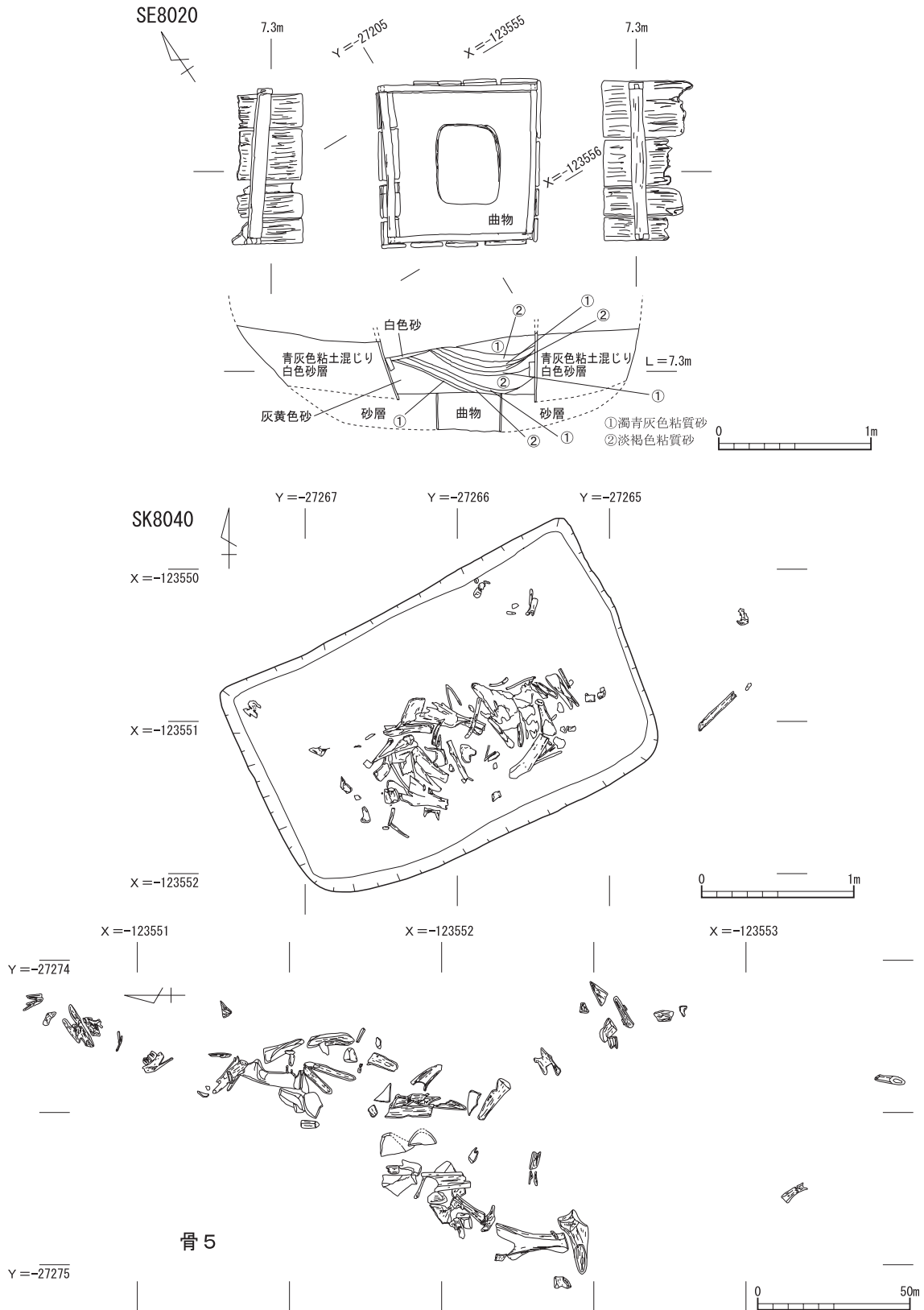
動物遺体は6～8C区に集中して認められた。不整形な円形あるいは方形土坑内から出土したものもある。

東端で溝S D 8034を確認した。ここからは多数の土師器皿、瓦器椀が出土した。溝は幅8m、深さ1.2mである。溝の東には断面がかまほこ状に盛り上がった高まりがある。畔と考えられる。

### 4) 出土遺物

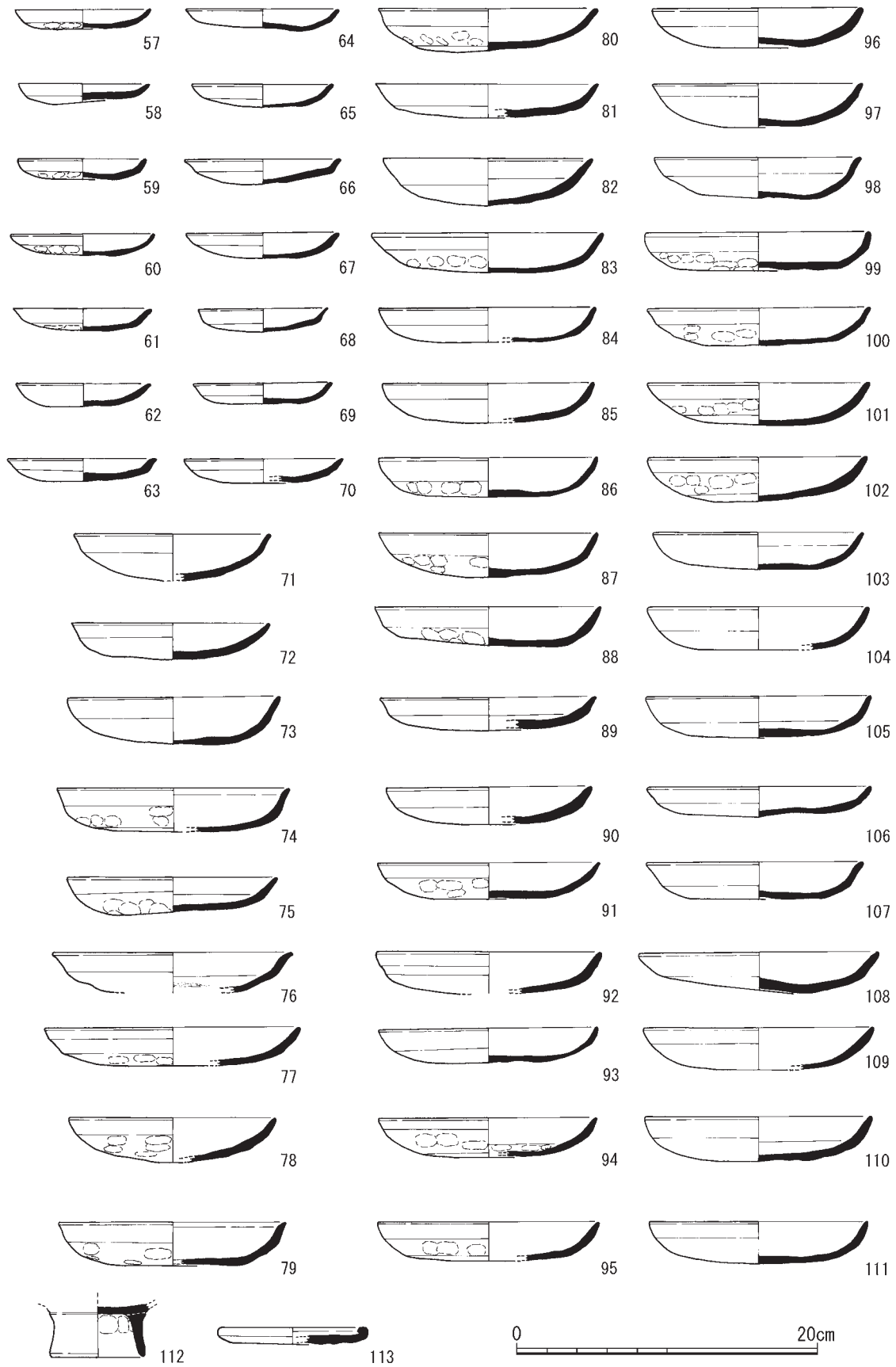
遺物は整理箱で65箱出土した。種類は土師器皿、須恵器杯・甕・鉢、瓦器椀・羽釜・鍋、信楽鉢・甕、古瀬戸杯、中国製青磁椀・皿、白磁角杯・椀、銭貨、石製品などである。今回図化した遺物のうち、114・120は包含層、124・126は中世の溝S D 8034の上層から出土し、それ以外はすべて溝S D 8034から出土したものである。

57～70は土師器皿の小皿である。胎土・焼成は良で、色調は淡褐色である。口縁端部を一段



第16図 第21次調査井戸 S E 8020、土坑 S K 8040、骨 5 平面図

ナデし、内面はナデ、外面は不調整である。57の口径は8.6cm、器高1.7cmである。平安京内膳町分類のDタイプで、八幡地域や乙訓地域に多いタイプである。71～111は土師器皿の中皿であ



第17図 第21次調査出土遺物実測図(1)



る。胎土・焼成・色調は小皿と同様である。調整は口縁部を一段ナデし、その下はユビオサエを施している。このため、口縁部は二段に屈曲している。内膳町分類のDタイプである。88が典型例で、口径15.0cm、器高2.6cmである。112は土師器高台付皿である。高台のみ遺存している。胎土は密で、細かな白色砂を含む。焼成は良で、色調は淡褐色である。113は土師器コースター型皿である。口径9.7cm、器高1.2cmである。

114～122は瓦器椀である。表面が摩滅したものが多い。114・120は精査中に出土した。それ以外はS D8034から出土した。115・116の体部は外開きで、直線的であり、和泉型か。色調は灰色～黒灰色である。117は内外面ともミガキを施している。口縁端部内面には口縁部に平行して沈線を施す。楠葉型である。118は外開きした体部に、少し屈曲させた口縁部をもつ。119は内外面とも密なミガキを施す。見込みには1方向のミガキを施す。高台は断面が三角形で、貼り付け高台である。口縁端部内面には口縁部に平行して沈線を施す。楠葉型である。口径14.6cm、器高5.4cm、胎土は密で、焼成は良、色調は黒灰色である。120は内外面ともミガキを施す。楠葉型か。121は内面に密なミガキを施す。体部中位がもっとも厚い。高台は断面が三角形で、貼り付け高台である。見込みには一方向のミガキを施す。122は内外面とも密なミガキを施す。口縁端部内面には口縁部に平行して沈線を施す。楠葉型である。口径15.7cm、器高5.5cmである。

123は須恵器杯である。底部は糸きりであるが、貼り付け高台である。124は東播磨系の須恵器鉢である。125は中国製白磁角杯である。削り出し高台である。畳み付けは少し削り込んでいる。体部表面は多面体(6面)に成形されている。底径3.6cm、現存高2cmである。126は古瀬戸杯である。内面の見込みには多重の円弧を印刻している。

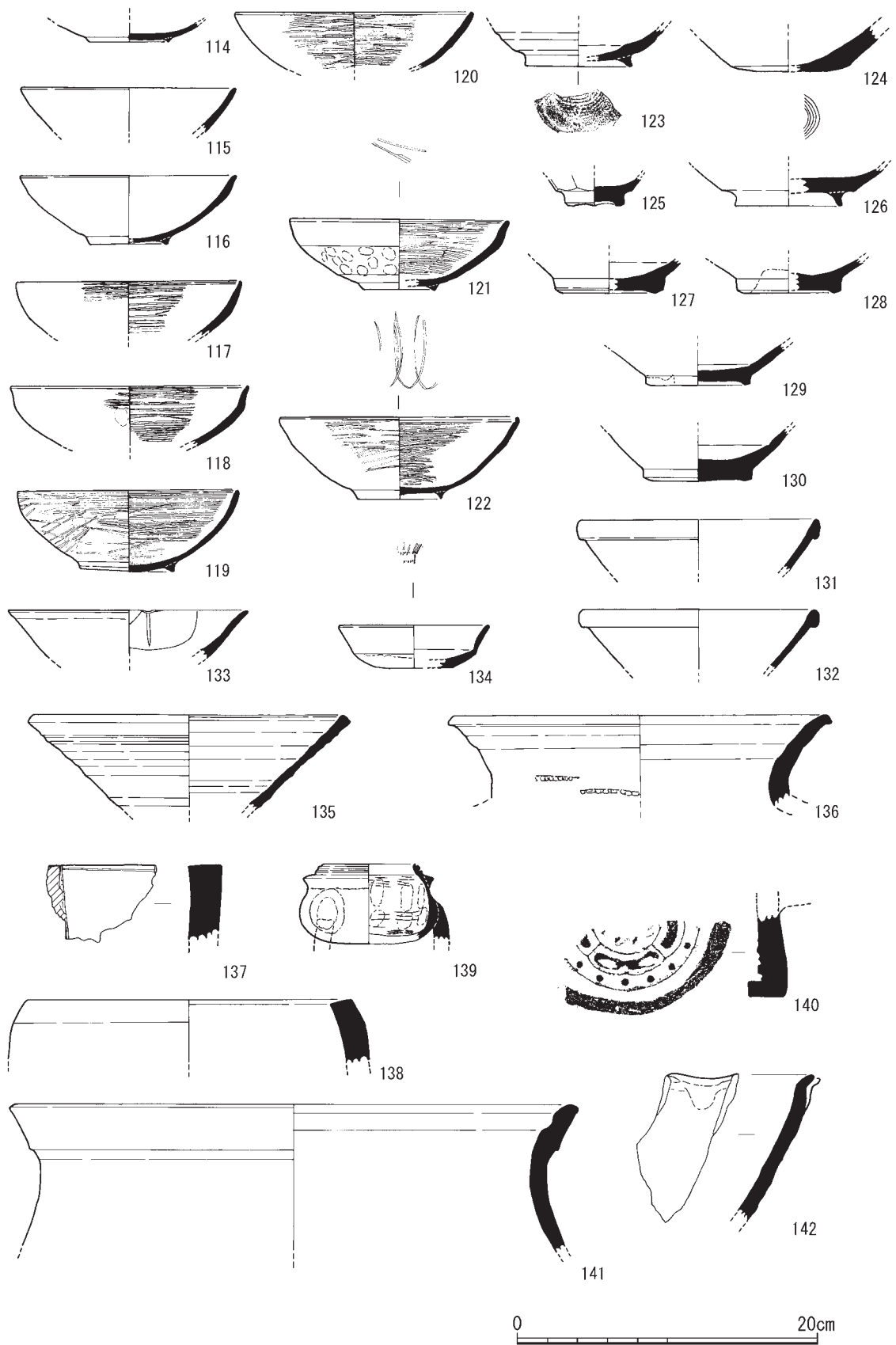
127～132は中国製白磁椀である。口縁部は玉縁状で、底部は削り出し高台であるが、畳み付け中央はやや浅く削っている。133は中国製青磁椀である。釉色は緑灰色である。現存では口縁部に1か所に切り込みを入れている。その切込みから縦方向に灰白色の筋を描いている。口径17.9cm、現存高3.2cmである。龍泉窯系である。134は中国製青磁皿である。内面見込みに櫛目を施す。釉色は緑灰色で、底部外面は露胎である。同安窯系である。

135は須恵器鉢である。東播磨系である。色調は灰色で、口縁部は黒変している。口径20.6cm、現存高6.3cmである。136は須恵器甕である。

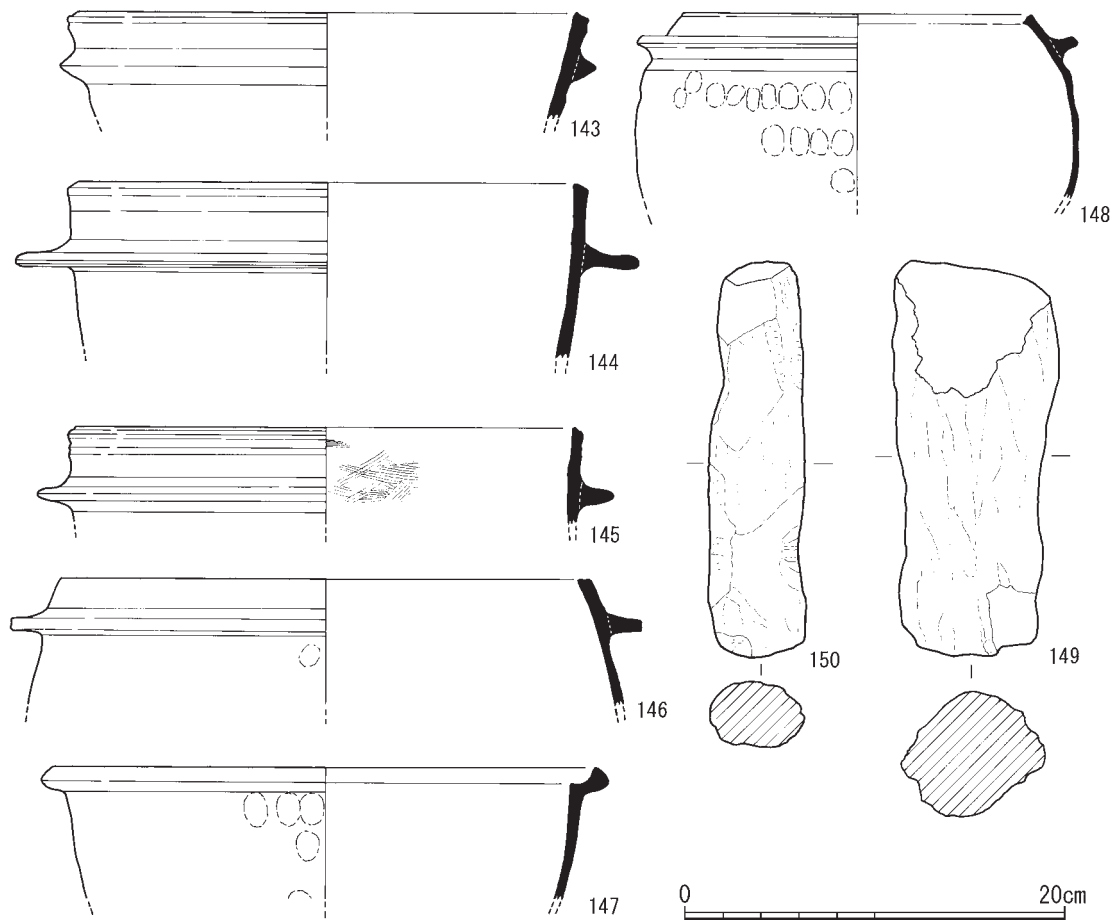
137は滑石製品である。もとは石鍋の底部であったようで、外面に煤が付着している。上部は水平方向に削り取っている。内面は「L」字状に切込みを入れて、方形にしようとしたが、途中で欠損したようである。138は滑石製石鍋である。口縁部のみ遺存している。外面には煤が付着している。

139は三足のつく瓦器羽釜である。140は軒丸瓦である。外縁部が突出し、内区には珠文、さらに内側には巴文が施されている。平安時代後期である。

141は信楽甕である。色調は橙褐色で、内外面ともナデで仕上げている。口縁部内面に凹線を施す。口径37cm、現存高10cmである。142は信楽鉢である。片口部分のみ遺存している。色調は橙褐色である。



第18図 第21次調査出土遺物実測図(2)



第19図 第21次調査出土遺物実測図(3)

143は土師器羽釜である。口縁部は外開きで、口縁部直下に短い鏝をつけている。鏝の断面は三角形である。中世京都に多いタイプである。144・145は瓦器羽釜である。144は直立する体部の上部に長い鏝をつけたものである。中世の大阪に多いタイプである。145は直立する体部の上部に短い鏝をつけたものである。146は土師器羽釜である。体部は丸い。口縁部直下に短い鏝を付けている。147は瓦器鍋である。口縁部は外側に短く屈曲している。中世京都タイプである。148は瓦器羽釜で、体部は丸い。口縁部直下に短い鏝を付けている。鏝はやや上に上がっている。

149は石製品である。外形は円棒状である。上端が切断されたように平滑である。上部と下部の一部に横方向に削った痕がある。長さ20.8cm、幅4.8cm、厚さ3.6cmである。石棒に類するものかの知れない。色調は銀色である。広域変成岩の一種の結晶片岩である。150は石製品である。上端が切断されたように平滑である。それ以外は加工した痕は認められない。149と同じ材質で、加工するため、この地にもたらされた可能性がある。

154は中国製白磁皿である。底部は露胎である。釉色は黄白色である。12～13世紀。155は中国龍泉窯青磁椀である。156は瓦器皿である。157は瓦器椀である。158は瓦器釜である。

##### 5) まとめ

今回の発掘調査では、鎌倉時代からの生活の痕跡を確認できた。出土遺物の摩滅度を観察する

限り、洪水による再堆積ではなく、周辺部より人為的に搬入されたもので、これらの遺物を包含した土壌で、洪水層上面を整地して土地利用を図っていた。おそらくは、集落の縁辺部に当たり、中世段階でも周辺部で牛や馬が飼育されていた可能性が高い。近世には耕作地として田畑に利用されたようである。

## 6. 地上観察結果

中塚氏の分析(紹介8) 中塚氏は、地質学の立場から木津川河床遺跡について論及している。氏の観察結果によれば、歴史的な断面の形成年代は、

a) 古墳時代～平安時代(少なくとも奈良後期～平安時代前期下限)には、古木津川と微高地(自然堤防状)が形成され、その外側に古墳時代の集落が形成される。

b) 平安時代前期～中世(10～13世紀前半)には広大な河床面が形成される。

c) 平安時代末～鎌倉時代(12～13世紀前半)には「八幡惣町」の町場が形成される。河床域が北方へ移動する。井戸群が構築される。これは、地下水位の低下、水量の減少があったのではと推測している。これらの井戸は盛り土の上から掘られたのではないかと推測している。この時期に木津川・桂川系河床面から水田耕作地への転換があったとした。

d) 中世末～近世初頭以降(16世紀代～)天井川地形となる。河床が上昇し、本格的な堤防構築の時代となる。液状化の履歴あり。慶長の伏見地震に関連か。「澱川」の形成。水害が多数確認される。

e) 1870年代以降、現在。川の付け替えによる治水実施。川の傾斜はゆるやかである。木津川では20世紀後半、土木建築用資源としての「川砂利」の過度の採取と、ダム構築をはじめとする治水事業の効果と共に、大量の水が流れることになり、河床面が大きく落ち込むこととなったと結論付けた。

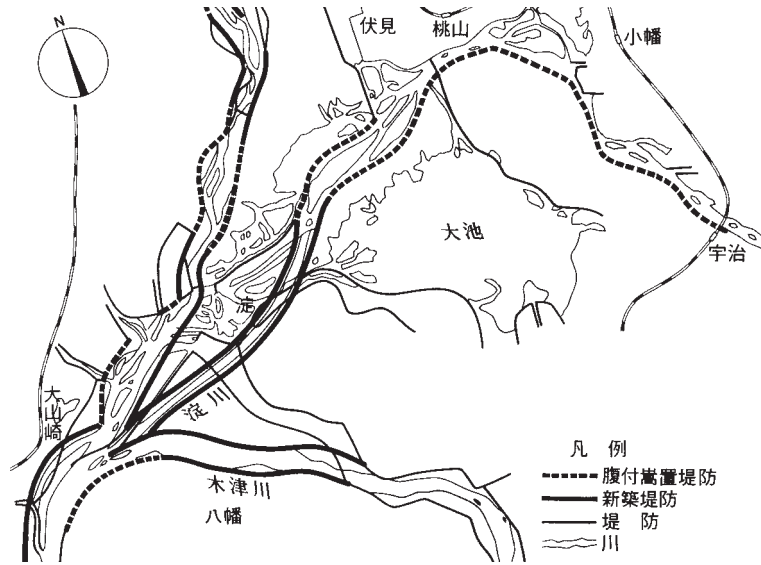
## 7. まとめ

御幸橋の西側で、広い面積を調査することができた。調査前の形状は、河川敷より2～5mほど高く、旧地表面が残っていた。調査の結果、上層の近世面は標高8.9m、下層の平安時代前中期面(青灰色粘土層)が7.4mであることが判明した。湿地であったことを示す青灰色粘土の中には、牛馬が埋没しており(牛の方が多い。丸山真史氏より)、放牧された牛馬の存在と、その自然死以外に、なんらかの祭祀がこの地であったことを示しているのかもしれない。湿地は徐々に北側へ後退し、陸化したようであるが、特に、平安時代中後期の洪水によって1m近く砂が堆積し、一気に陸化した。その後、田畑が形成されたようで、耕作に伴う溝が確認された。第21次調査で、中世の井戸が1基確認された。おそらく、このあたりまでが集落域であったことを示している。20次調査地の西端の溝(SD7071)と21次調査の東端の溝は耕作地の区画を示していると考えられる。その距離は約160mである。

なお、西端の溝近くで確認された建物や柵は集落が1時期広がっていた可能性があるが、集落

の中心があると考えられる地点との間に耕作地があることから、耕作地域内にある簡便な施設であったといえよう。

中世の耕作の採集段階に大地震があり、下から噴き上げた砂（液状化現象の一部）が各所で認められる。おそらく、伏見大地震（1596年）に伴うものと考えている。この状況は上流側でも確認されており、広範囲に災害が及んだことが知られる。



第20図 河川改修図（『図説 京都府の歴史』より転載・一部修正）

以下、寒川旭の見解を記す。

土層観察の結果、伏見大地震時の地面の直上にある黄色粘土（図版6の1）は、地震の2日後にあった洪水に由来する。地震によって波打った地面のくぼ地に溜まったと解釈できる。

つぎに増田富士雄理事の見解を付す。

調査地北部で確認された沼地は青色粘土で形成されている（図版8の2）。この層は自然堆積である。また、この層を覆う粘質土層（第4図37層・厚さ20～30cm）は洪水が治ったときに形成されたものである。その後、2度ほど洪水があり、その上に耕作土が形成された。調査地東壁の中央部（第4図）には青色粘土層が高くあるが、これは地震により、盛り上がった結果ではないか。

## 木津川河床遺跡関係資料

### 資料紹介等

- 紹介1 熊野正也ほか「木津川底遺跡出土の土器」（『土師式土器集成』本編1 東京堂出版）1971
- 紹介2 吉村正親「木津川川底発見の土器」（『京都考古』第22号）1976
- 紹介3 金沢 陽「木津川河床採集の陶片」（『出光美術館館報』第49号 出光美術館）1985
- 紹介4 松村 茂「木津川河床遺跡採集遺物」（『京都考古』第66号）1992
- 紹介5 河上誓作・中世土器研究会「淀川・木津川河床の採集資料」（『中近世土器の基礎研究』I X 日本中世土器研究会）1993
- 紹介6 中世土器研究会「淀川・木津川河床遺跡の中国陶磁器」（『中近世土器の基礎研究』X III 日本中世土器研究会）1997
- 紹介7 久保哲正「木津川河床遺跡採取の土器（1）」（『山城郷土資料館報』第15号 京都府立山城郷土資料館）1998
- 紹介8 中塚 良「水辺の自然地誌学の試み—京都盆地中央部、「三川」合流地点における地形、遺跡、景観—」（『地形環境と歴史景観』2004
- 紹介9 大洞真白「八幡市内遺跡見学記—男山東麓を中心に—」（『乙訓文化遺産』13号 乙訓の文化遺産を守る会）2007

### 発掘報告書等

- 報告1 長谷川 達「木津川河床遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第8冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 報告2 黒坪一樹・長谷川 達「木津川河床遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第11冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
- 報告3 黒坪一樹・松井忠春「木津川河床遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 報告4 岩松 保・松井忠春「木津川河床遺跡昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第19冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
- 報告5 岩松 保・松井忠春「木津川河床遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第23冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 報告6 岩松 保「木津川河床遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第30冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 報告7 竹井治雄「木津川河床遺跡平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 報告8 小池 寛「木津川河床遺跡平成3年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第49冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 報告9 赤松一秀「木津川河床遺跡分布調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第23集 八幡市教育委員会 1997
- 報告10 榊井豊成・赤松一秀「奥ノ町(木津川河床)遺跡発掘調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第25集 八幡市教育委員会 1998
- 報告11 赤松一秀「木津川河床遺跡第2次分布調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第26集 八幡市教育委員会 1998
- 報告12 八十島豊成「木津川河床遺跡第3次分布調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第30集 八幡市教育委員会 2000
- 報告13 八十島豊成「木津川河床遺跡試掘調査」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第30集 八幡市教育委員会 2000
- 報告14 森 正「八幡市木津川河床遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 2001
- 報告15 石尾政信「木津川河床遺跡第13次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第99冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 報告16 松尾史子「木津川河床遺跡第14次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第102冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 報告17 増田孝彦「木津川河床遺跡第15次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第106冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 報告18 柴 暁彦・増田孝彦「木津川河床遺跡第16次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第113冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005
- 報告19 大洞真白「木津川河床遺跡第4次分布調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第40集 八幡市教育委員会) 2006
- 報告20 松尾史子「木津川河床遺跡平成18年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第122冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007
- 報告21 大洞真白・井戸竜太・小森俊寛・寒川 旭「木津川河床遺跡(第19次)発掘調査報告書」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第47集 八幡市教育委員会 2008
- 報告22 伊野近富「木津川河床遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第106号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008

ここで、示した標高は各報告の表示に沿っているが、これが大阪湾の海拔(O.P.)なのか東京湾(T.P.)なのかについては、検討しておらず、両者が混在している可能性があり、注意を要する。なお、高さは大阪湾のほうが1mほど高い。

# 圖 版



(1) 第20次調査地全景(北東から)



(2) 第20次調査地全景(西から)



(3) 第20次調査地全景(上が北)





(1) 第20次調査地全景(北西から)



(2) 第20次調査地重機掘削状況  
(東から)



(3) 第20次調査地上層人力掘削状況  
(東から)



(1) 第20次調査地上層全景(東から)



(2) 第20次調査地上層東部(東から)



(3) 第20次調査地上層土坑 S K7003  
(右：南から)



(1) 第20次調査地上層西部(東から)



(2) 第20次調査地上層掘削状況  
(西から)



(3) 第20次調査地上層全景(東から)



(1) 第20次調査地上層足跡・B 2区  
(西から)



(2) 第20次調査地南壁東部土層断面  
(北西から)



(3) 第20次調査地南壁東部  
土層断面・噴砂と杭跡(北から)



(1) 第20次調査地南壁西部C 2区  
土層断面噴砂(北から)



(2) 第20次調査地東壁土層断面  
(南西から)



(3) 第20次調査地下層全景(西から)

(1) 第20次調査地下層西部  
掘立柱建物跡全景(南から)



(2) 第20次調査地下層西部  
掘立柱建物跡柱穴(西から)



(3) 第20次調査地下層西部  
溝跡全景(南から)





(1) 第20次調査地下層中央部  
(南から)



(2) 第20次調査地下層中央部  
土層断面(北から)



(3) 第20次調査地下層湿地調査状況  
(北西から)



(1) 第20次調査地下層湿地土層断面  
(北東から)

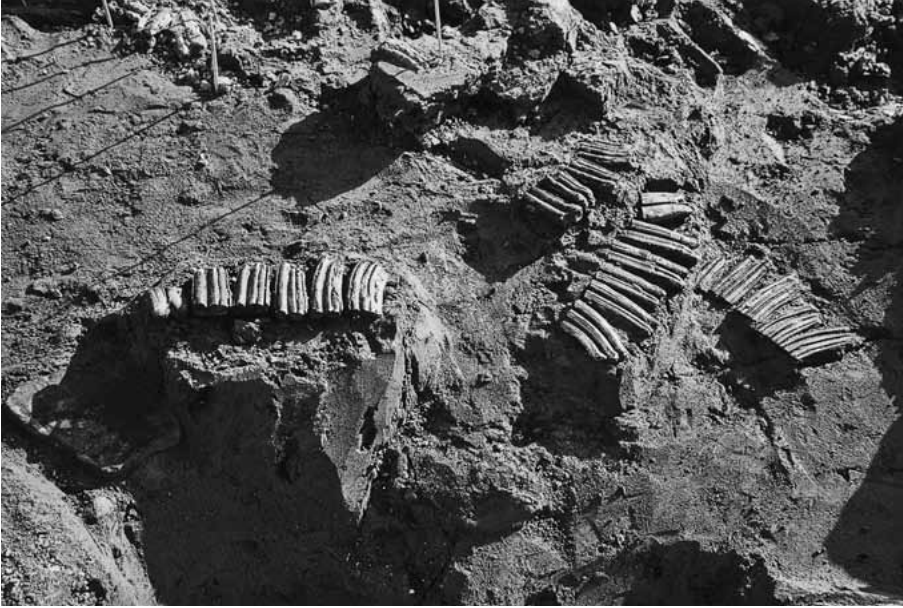


(2) 第20次調査地下層全景(東から)



(3) 第20次調査地下層湿地内  
遺物検出状況(北から)





(1) 第20次調査地下層湿地内  
馬の歯検出状況(北から)



(2) 第20次調査地下層湿地内  
獣骨検出状況(北から)



(3) 第20次調査地下層中央～東部  
(南西から)

(1) 第20次試掘調査地  
第1トレンチ全景(東から)



(2) 第20次試掘調査地  
第2トレンチ全景(東から)



(3) 第20次試掘調査地  
第3トレンチ全景(東から)





(1) 第20次試掘調査地第4トレンチ  
調査風景(北から)



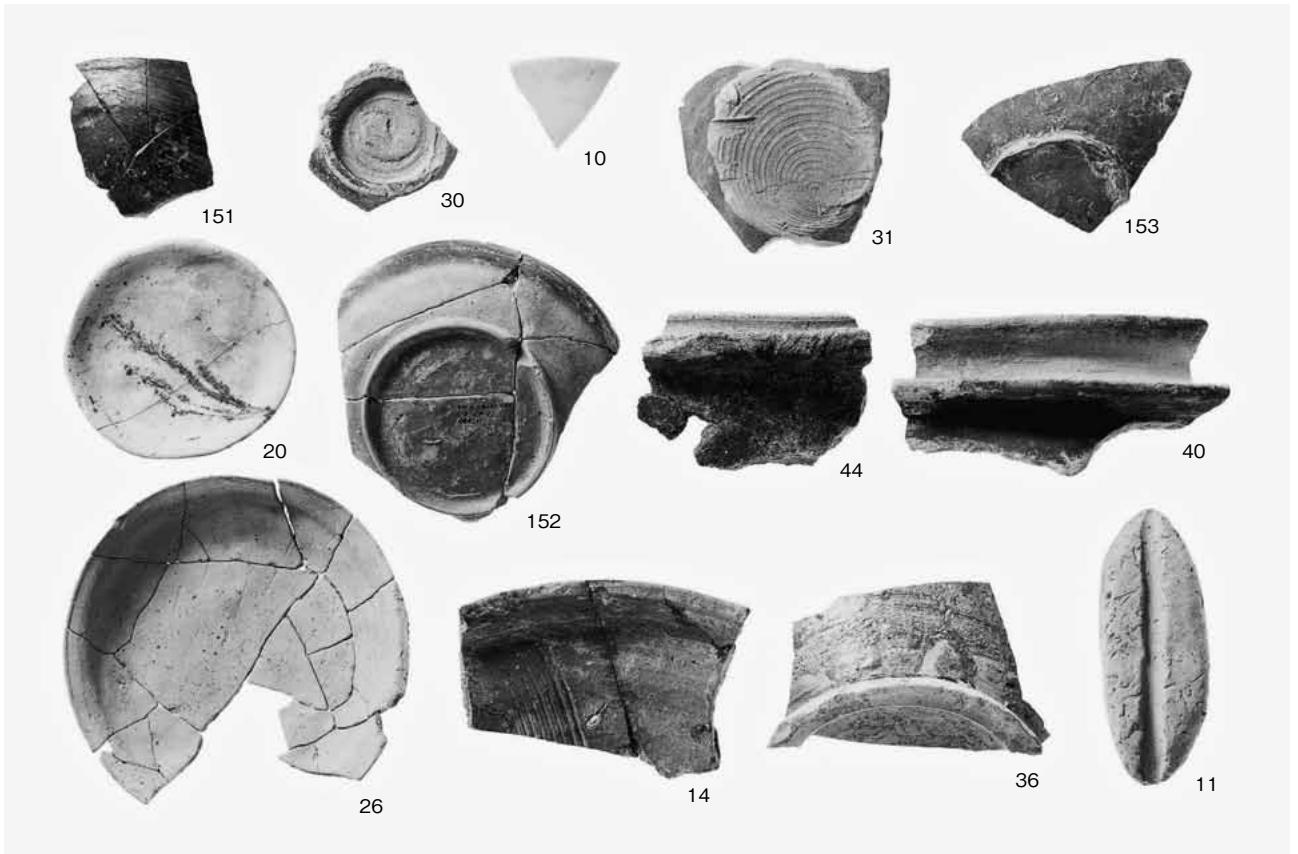
(2) 第20次試掘調査地第5トレンチ  
断ち割り(北から)



(3) 第20次試掘調査地第6トレンチ  
断ち割り(北から)



(1) 第20次出土遺物 1



(2) 第20次出土遺物 2



(1) 第21次調査地全景(北から)



(2) 第21次調査地重機掘削状況  
(北東から)



(3) 第21次調査地全景(東から)



(1) 第21次調査地南壁土層断面  
(北から)



(2) 第21次調査地上層西部(西から)



(3) 第21次調査地上層東部  
(南西から)



(1) 第21次調査地下層調査状況  
(北東から)



(2) 第21次調査地下層西部  
(南西から)



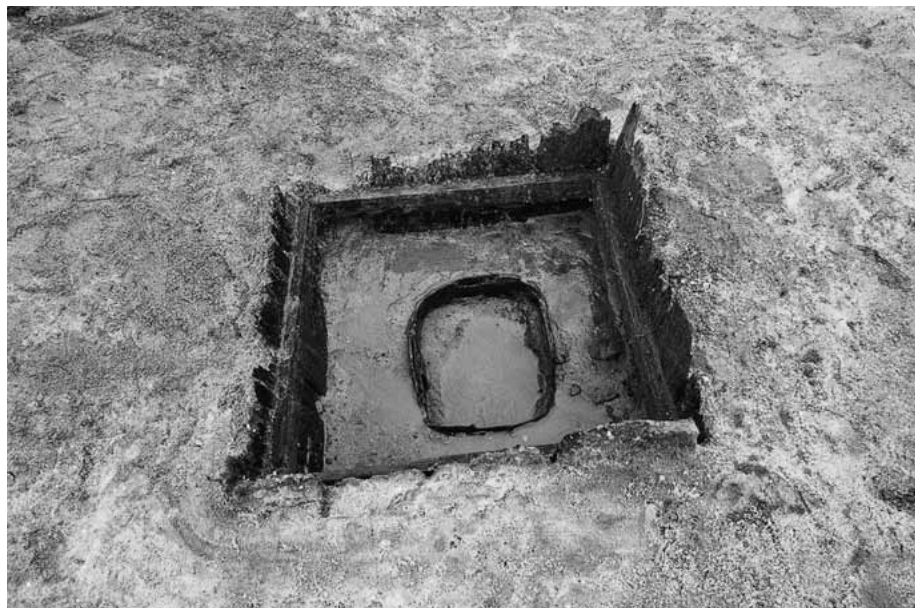
(3) 第21次調査地下層東部  
(南東から)



(1) 第21次井戸検出状況(南から)



(2) 第21次井戸土層断面(南から)

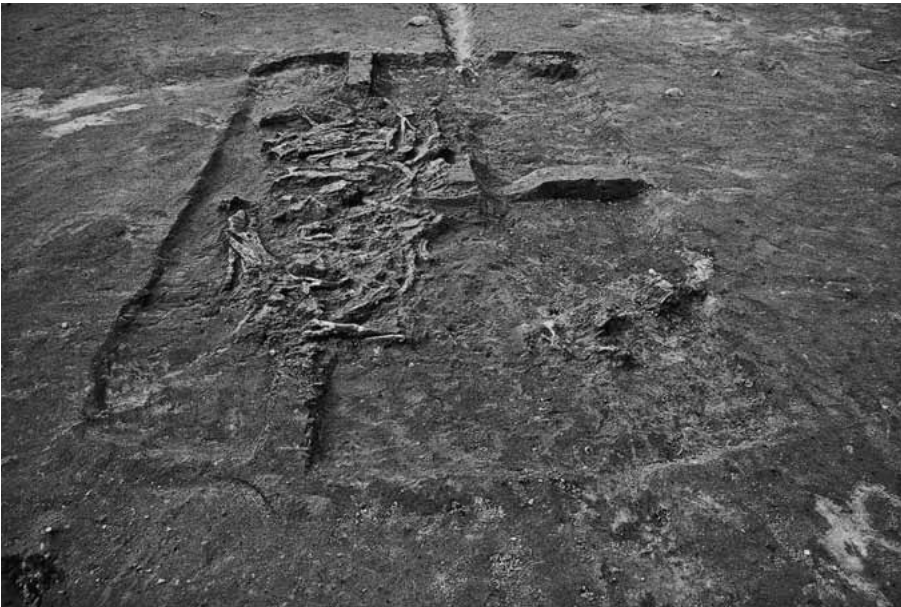


(3) 第21次井戸完掘状況(南から)





(1) 第21次土坑 S K 8046 獸骨  
検出状況(南西から)



(2) 第21次土坑 S K 8040 獸骨  
検出状況(南西から)



(3) 第21次B 7区 獸骨検出状況  
(西から)



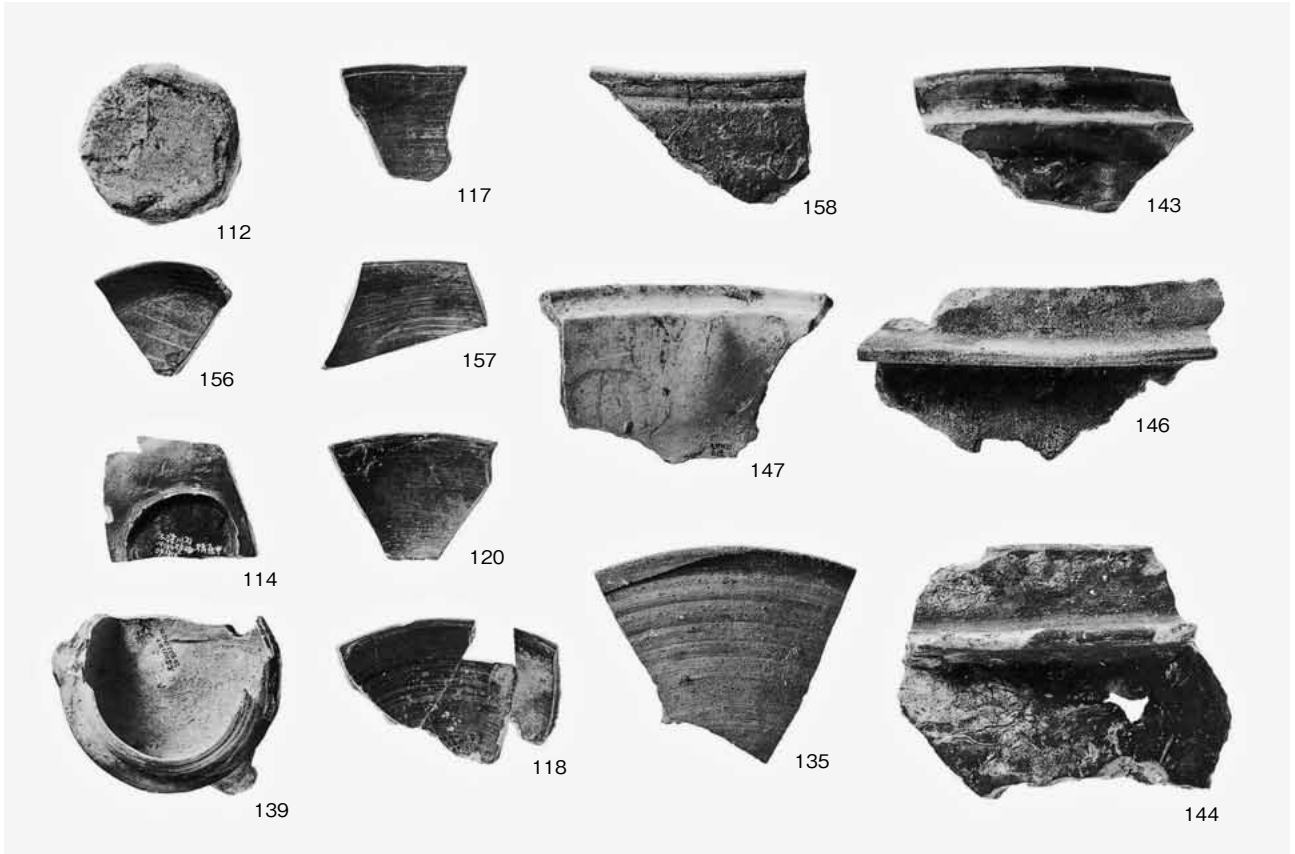
(1) 第21次獣骨検出状況(北から)



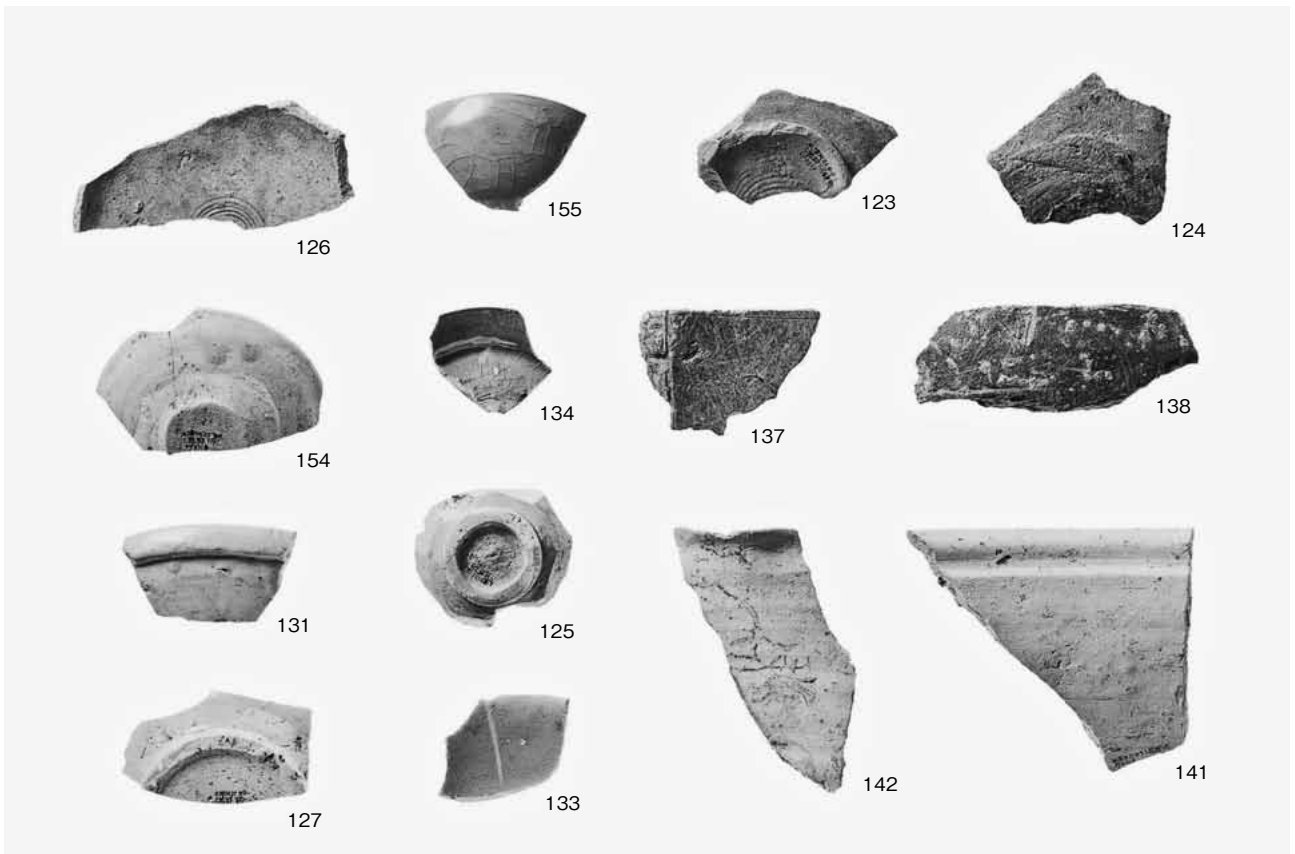
(2) 第21次調査地西部溝(北から)



(3) 第21次調査地西部溝断面  
(北から)



(1) 第21次出土遺物 1



(2) 第21次出土遺物 2